

枚方ふるさといきもの調査
報 告 書

平成20年 3 月

枚 方 市

目 次

第1章 調査の概要	1
1. 調査の目的	1
2. 調査計画	2
2-1. 淀川(枚方市域)における調査	2
(1) 調査方針	2
(2) 調査項目および内容	3
2-2. 相観植生図の改訂・分析	7
(1) 調査内容	7
(2) 分析方針	7
2-3. 調査の実施状況	7
第2章 調査結果	8
1. 植物	8
2. 淡水魚等水辺の生物	18
3. 陸上昆虫類	20
4. 水生昆虫類	27
5. 鳥類	28
6. 両生類・爬虫類	31
7. 哺乳類	32
8. 希少種	33
9. 枚方市における淀川の自然環境の特徴	36
9-1. 淀川の概要	36
9-2. 淀川の自然環境	38
第3章 相観植生図からみた緑地の変化	44
1. 相観植生図の改訂	44
2. 植生の変化状況	47
2-1. 緑被率の変化	48
2-2. 主な変化箇所の整理	50
3. 孤立林群の連続性の変化	58
3-1. 緑地のネットワークの持つ意味	58
3-2. 孤立林群のネットワークの分析	60
(1) ネットワークの核となる孤立林	60
(2) 孤立林の連続性	62
第4章 今後の生物多様性保全の取り組みの方向性	64
1. 枚方市における生物多様性保全に対する脅威	64
2. 枚方市における生物多様性保全に向けた取り組み事例	65
2-1. 開発抑制のための法的制度の設置	65
2-2. 東部里山の保全活動	66
2-3. 公共施設におけるビオトープの創出	67
3. 今後の生物多様性保全に向けた取り組みの方向性	68
3-1. パートナーシップのあり方	68
3-2. いきもの調査を生物多様性保全に活かすために	69

第1章 調査の概要

1. 調査の目的

本調査は平成12・13年度に実施された「枚方ふるさといきもの調査」に続く第4回の自然環境調査である。

今回は淀川河川敷一帯を調査対象エリアに絞って詳細なデータを収集・整理するとともに、市域全体の相観植生図の改訂・分析を行い、枚方市の自然環境保全施策に資する資料の提示を行うことを目的とする。調査・検討の流れを図-1-1に示す。

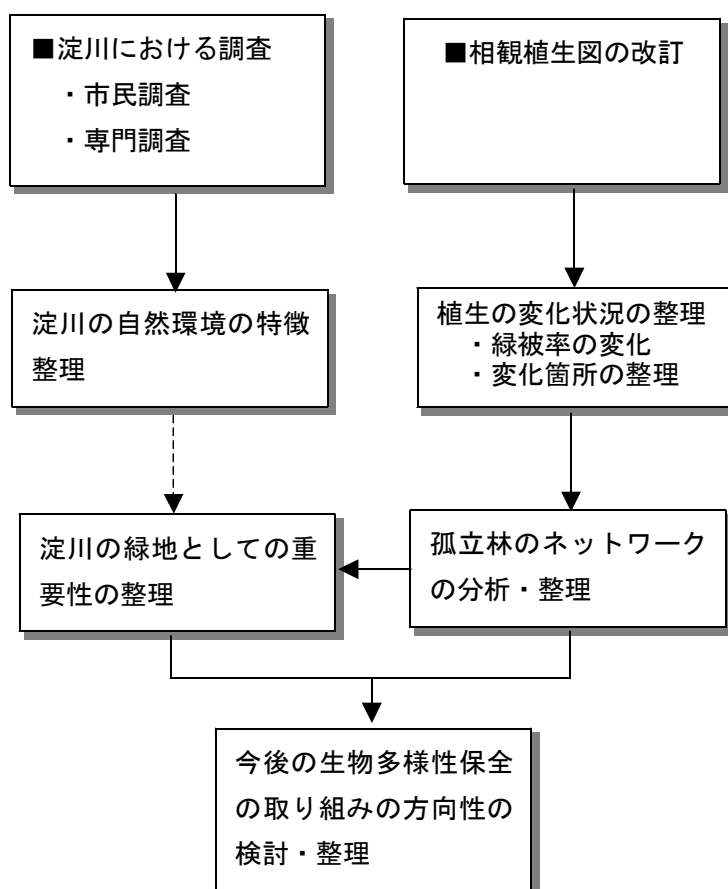


図-1-1 調査・検討フロー

2. 調査計画

2-1. 淀川(枚方市域)における調査

(1) 調査方針

本調査は市民による調査を主体とし、専門調査にて補完を行い、調査結果を得るものである。

市民調査は多人数、幅の広い年齢層の調査員構成を前提に安全面への配慮が必要であり調査内容には一定の制約はあるものの、生物の種類を把握するという点においてはそのマンパワーにより分類群によっては専門家による調査に匹敵する（場合によっては上回る）生物種の確認が期待できる。

また、生物の種類を調べるという作業は調査においては最も基本的な作業であり、様々な知識レベルの市民が相互に教え教わりながら調査を行うことができ、市民が自発的な自然環境への関心の喚起・啓発の場となりうるという意味からも市民調査に適した調査であるといえる。

一方、専門調査では専門的な見地から上記のような市民調査による生物種の確認の補完を行うことを基本に調査を実施する。

以上、今回の淀川における調査の調査方針は表-1-1のとおり整理できる。

表-1-1 調査方針

区 分	調 査 方 針
市民調査	・市民への自然環境への関心の喚起・啓発を主目的に調査を行う。 ・生物の種類把握に主眼を置いた調査を行う。 ・多人数、幅の広い年齢層の調査員構成を前提に安全面を考慮した調査を行う。
専門調査	・市民調査では安全面や技術的な点から調査の難しい分野について補完的な調査を行う。

(2) 調査項目および内容

① 市民調査

市民調査の調査項目および内容を表-1-2に示す。

表-1-2 市民調査の概要

調査項目	調査内容
植物	一定のルート・区域を設定し、目視観察を主体に生育種の種名を記録する。現地にて種名の不明な種については、標本として採取し専門家による同定を行う。
淡水魚等の水辺の生物	樋之上ワンドを主な対象としてたも網により生息種を捕獲し、その種名および数量等を記録する。記録後は放流する。
昆虫類	一定のルート・区域を設定し、捕虫網(水生昆虫の場合はたも網)を用いて捕獲し、種名を記録する。現地にて種名の不明な種については、標本として採取し専門家による同定を行う。
鳥類	一定のルートを設定し、肉眼もしくは双眼鏡により生息種を目視観察し、種名を記録する。
両生類・爬虫類	一定のルート・区域を設定し、目視観察もしくはたも網等による捕獲により生息種を捕獲し、その種名を記録する。
哺乳類	一定のルート・区域を設定し、目視観察によりフィールドサインを確認し、生息種を記録する。

なお、市民調査においては図-1-2に示すように、講師、アシスタントが指導的役割を行い、その指導の下、市民調査員が調査を行う形をとる。講師を表-1-3に示す。

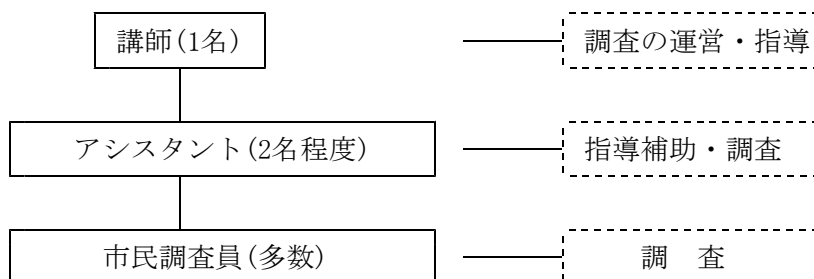


図-1-2 市民調査の調査体制

表-1-3 市民調査の講師一覧

調査項目	講師氏名	所属等
植物	有馬忠雄	淀川環境委員会委員(国土交通省委嘱)
淡水魚等の水辺の生物	柴田利彦	大阪自然環境保全協会 理事
陸上昆虫類	河合正人	元 あやめ池自然博物館 学芸員
水生昆虫類	谷 幸三	大阪産業大学 非常勤講師
鳥類	関 優	大阪自然環境保全協会 専門研究員
両生類・爬虫類	柴田利彦	前 掲
哺乳類	畠佐代子	全国カヤネズミ・ネットワーク代表

②専門調査

専門調査では調査方針で示したように、市民調査における生物の種類の把握に主眼を置いた調査の補完調査を行った。

調査項目ごとの調査内容を表-1-4に示す。

表-1-4 専門調査の内容

調査項目	調査内容
植物	市民調査の補完として市民調査では詳細な把握が困難な低水敷の水際部等、希少種の生育可能性のある地域を重点的に調査を行い、これらの生育種の確認とともに位置および生育環境に関するデータを補完する。
淡水魚等の水辺の生物	樋之上ワンドを主な対象として市民調査では実施困難な地曳網(状況に応じて定置網)による調査を市民調査と合同で実施する。調査では捕獲された種の確認と個体数の記録を行う。
昆虫類	市民調査で未踏査となる区間の任意採集調査の他、市民調査では実施しないベイトトラップ法による調査により、特に地表徘徊性昆虫の生息種データの補完を行う。
鳥類	市民調査で未踏査となる区間の補完や市民調査データの検証を中心に踏査を行い、確認種と個体数の記録を行う。
両生類・爬虫類	専門調査では市民調査で未踏査となる区間の補完や、市民調査データの検証を中心に行う。
哺乳類	市民調査で未踏査となる区間の任意観察や市民調査では時間的な制約上実施の困難な赤外線センサーカメラによる調査や夕刻のコウモリ調査を中心に実施し、確認種の記録を行う。

③調査時季

各調査項目の市民調査および専門調査の実施時季はに示すとおりである。本調査は平成18年度および平成19年度の2ヶ年で各時季に1回の調査を実施することとしており、専門調査は市民調査の補完的位置づけを考慮し、極力各時季の市民調査が完了後に実施することとした。

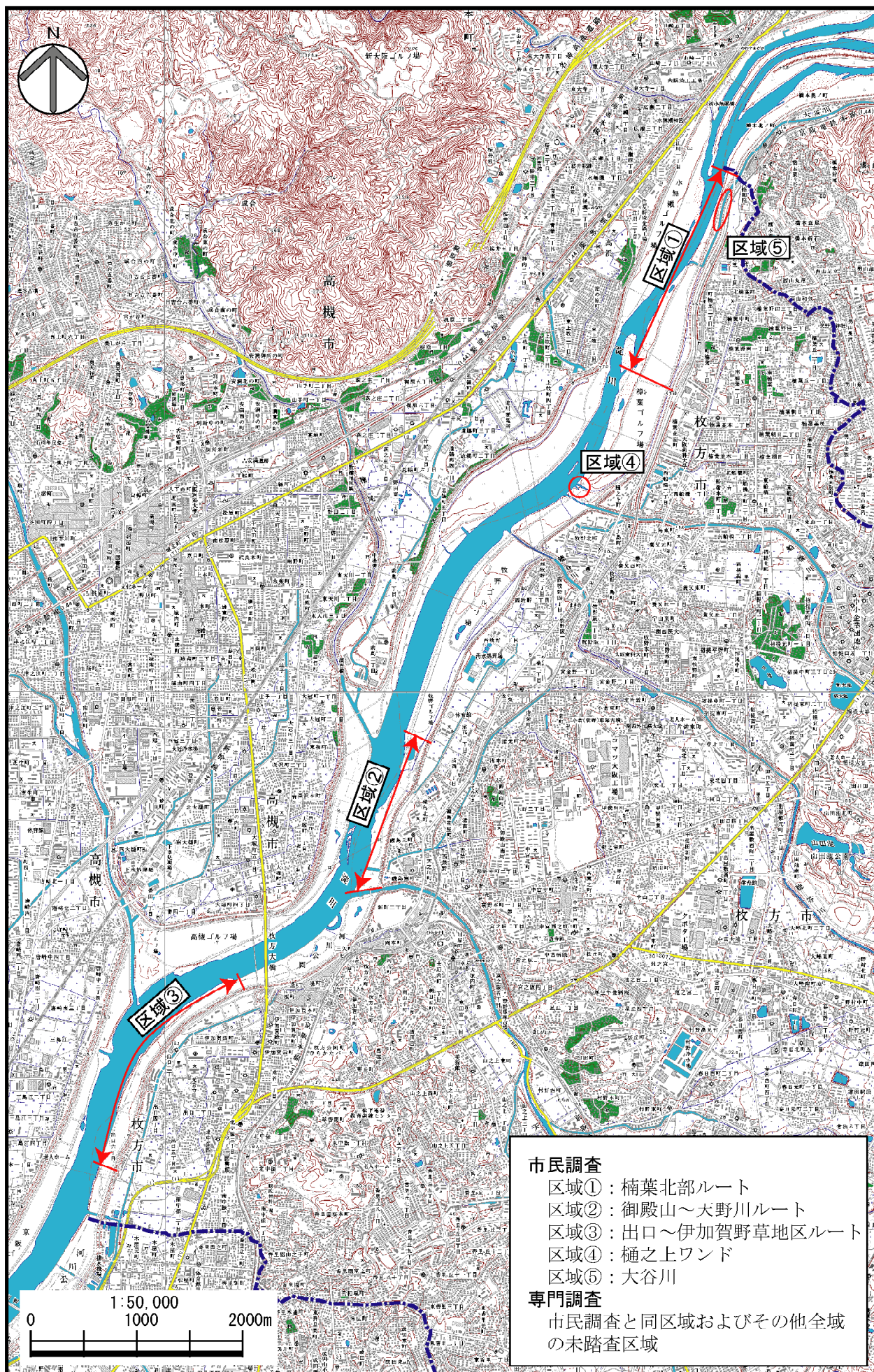
表-1-5 調査時季

項 目	調査時季			
	夏季	秋季	冬季	春季
植物	○	○		○
淡水魚等水辺の生物	○			
陸上昆虫類	○	○		○
水生昆虫類	○			○
鳥類	○	○	○	○
両生類・爬虫類	○			○
哺乳類		○	○	○

④調査区域

調査区域は図-1-3に示すとおりである。市民調査は、河川敷のうちゴルフ場、河川公園を避け、3つのルートと2つの水域を設定し、各季毎に調査区域を変え調査を実施した。

専門調査は、市民調査で未踏査の区域も含め全域を対象に、存在が確認されている種を確認する機会が高いと考えられる環境に重点を置きながら調査を実施した。



2-2. 相観植生図の改訂・分析

前回調査の「枚方ふるさといきもの調査」（平成12・13年）で作成した相観植生図の改訂及び分析を行う。

(1) 調査内容

改訂のための調査は、最新の航空写真の判読による調査を基本に行い、必要に応じて現地調査により植生区分の補正を行う。

なお、作図精度は経年的な変化をみる視点から平成12・13年度作成のものと同水準とするものとし、植生凡例は相観上の優占種を基本とした前回の凡例をもとに作成することとした。

(2) 分析方針

改訂した相観植生図を基に、緑被率の変化の他、都市域に残存する緑地（孤立林、農耕地、水域など）の変化を整理し、その変化要因ならびにその変化に伴うエコロジカルネットワークの変化について考察することとした。

2-3. 調査の実施状況

調査の実施状況は表-1-6に示したとおりである。

表-1-6 調査実施状況一覧表

調査区分	調査分野	調査項目	平成18年度			平成19年度		
			夏季	秋季	冬季	春季	夏季	秋季
市民調査	植物		8/26 区域②	10/21 区域③		4/14 区域①		
	淡水魚等水辺の生物		8/19 区域④					
	昆虫類	陸上昆虫類	9/2 区域②	10/29 区域①		4/22 区域③		
		水生昆虫類	9/10 区域④			4/7 区域①		
	鳥類		7/29 区域②	10/7 区域①	2/17 区域③	5/19 区域②		
	小動物	両生類・爬虫類	8/5 区域③			5/26 区域⑤		
		哺乳類		10/14 区域②	1/27 区域①	5/12 区域③		
専門調査	植物		8/26			5/28		11/2
	淡水魚等水辺の生物		8/19					
	昆虫類	陸上昆虫類		10/31		5/17	8/1	
		水生昆虫類				5/17	8/1	
	鳥類			10/31	1/19	5/17	8/2	
	小動物	両生類・爬虫類				5/8	8/1	
		哺乳類		10/31	1/19	5/18		
相観植生図の改訂・分析								10/19

市民調査区域 区域①: 楠葉北部ルート
 区域②: 御殿山～天野川ルート
 区域③: 伊加賀～出口野草地区ルート
 区域④: 樋之上ワンド
 区域⑤: 大谷川

第2章 調査結果

1. 植物

植物調査では、表-2-1に示す99科440種が確認できた。

調査対象地である枚方市域の淀川河川敷は、堤防法面を降りると、広い高水敷上に様々な草地や樹林や土地利用が展開し、さらに水域に向かって行くと低水護岸部から先は多くの区間で砂州がみられ、攪乱の程度に応じて、砂礫地や草地、ヤナギ林やその他広葉樹林等様々な植生がモザイク状に分布している。

堤防法面では、定期的な草刈り管理に対応して、イネ科のチガヤ、ネズミムギ、セイバンモロコシをはじめ、ヨモギ、ヒメジョオン、セイトカアワダチソウなどの路傍雑草や帰化植物が多くみられた。

高水敷では、御殿山付近のようにニワウルシ(シンジュ)、センダン、エノキ、ムクノキ等からなる広葉樹高木林が成立しているところもみられ、こういった安定した環境ではヤマネコノメソウ、クサノオウ、カテンソウ、ヒカゲイノコズチ等の本来山地に生育するような種もみられた。また、高水敷にはセイトカヨシやオギからなるヨシ原や高茎草地も広くみられたがいずれも出水等による攪乱がなく安定しているために、市街地や農耕地にみられる種と同様の種が多く混在していた。ただ、部分的ではあるが高水敷でもやや湿った箇所や砂礫質な土壤環境となっているところではサデクサ、ミコシガヤなど、河川本来の自然性の名残りを示す種も確認することができた。

低水敷ではアカメヤナギやオオタチヤナギからなるヤナギ林が連続し、この下層にはミゾソバ、クサヨシなどの湿性立地を好む種やシケシダ、イノデ、クマワラビといったシダ植物などやや湿った環境を示す種がみられた。また、低水敷の開けた場所では、小規模な入り江状の水たまりが形成され、ミゾコウジュ、タコノアシ、カワヂシャなどの河川本来の種がみられた他、アサザ、オオカナダモ、エビモ、ヤナギモ、マツモなどの上流の琵琶湖から流れ着いたとみられる水草も確認することができた。

特筆すべき事象としては楠葉ワンドの水際部においてアズマツメクサ(大阪府レッドデータブック絶滅種)の生育を確認したことが挙げられる。

以上のように枚方市域の淀川河川敷は、植物の生育地としては堤内地と同様の安定した環境から、砂州のような攪乱の生じる不安定な環境等、種々の環境が揃っておりそれに対応した植物種が多数生育し、市域においても植物の多様性の高い地域であると考えられる。

表-2-1 植物確認種数内訳表

分類群				科	種
シダ植物				9	20
種子植物	裸子植物			0	0
	被子植物	双子葉類	離弁花類	54	193
			合弁花類	22	118
		単子葉類		14	109
合 計				99	440

表-2-2(1) 植物確認種リスト(1)

科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
トクサ科	スギナ	<i>Equisetum arvense</i>	○	○
フサシダ科	カニクサ	<i>Lygodium japonicum</i>	○	○
コバノイシカグマ科	イワヒメワラビ	<i>Hypolepis punctata</i>	○	○
	フモトシダ	<i>Microlepia marginata</i>		○
	ワラビ	<i>Pteridium aquilinum</i> var. <i>latiusculum</i>		○
イノモトソウ科	オオバノイノモトソウ	<i>Pteris cretica</i>	○	○
	イノモトソウ	<i>Pteris multifida</i>	○	○
チャセンシダ科	トラノオシダ	<i>Asplenium incisum</i>		○
オシダ科	ナガバヤブソテツ	<i>Cyrtomium devesciscapulae</i>	○	
	ヤブソテツ	<i>Cyrtomium fortunei</i>	○	○
	ベニシダ	<i>Dryopteris erythrosora</i>		○
	トウゴクシダ	<i>Dryopteris erythrosora</i> var. <i>dilatata</i>		○
	クマワラビ	<i>Dryopteris lacera</i>		○
	オクマワラビ	<i>Dryopteris uniformis</i>		○
	イノデ	<i>Polystichum polyblepharum</i>		○
ヒメシダ科	イヌケホシダ	<i>Cyclosorus dentatus</i>	○	
メシダ科	イヌワラビ	<i>Athyrium niponicum</i>		○
	シケシダ	<i>Deparia japonica</i>		○
	クサソテツ	<i>Matteuccia struthiopteris</i>		○
ウラボシ科	ノキシノブ	<i>Lepisorus thunbergianus</i>	○	
クルミ科	オニグルミ	<i>Juglans ailanthifolia</i>	○	○
	シナサワグルミ	<i>Pterocarya stenoptera</i>	○	○
ヤナギ科	アカメヤナギ	<i>Salix chaenomeloides</i>	○	○
	ジャヤナギ	<i>Salix eriocarpa</i>	○	
	カワヤナギ	<i>Salix gilgiana</i>	○	
	オオタチヤナギ	<i>Salix pierotii</i>	○	○
	コゴメヤナギ	<i>Salix serissaefolia</i>	○	
	タチヤナギ	<i>Salix subfragilis</i>	○	
ブナ科	アベマキ	<i>Quercus variabilis</i>	○	
ニレ科	ムクノキ	<i>Aphananthe aspera</i>	○	○
	エノキ	<i>Celtis sinensis</i> var. <i>japonica</i>	○	○
	アキニレ	<i>Ulmus parvifolia</i>	○	○
クワ科	イヌビワ	<i>Ficus erecta</i>	○	
	カナムグラ	<i>Humulus japonicus</i>	○	○
	トウグワ	<i>Morus alba</i>	○	○
	ヤマグワ	<i>Morus australis</i>		○
	クワ	<i>Morus bombycis</i>	○	○
イラクサ科	ヤブマオ	<i>Boehmeria japonica</i> var. <i>longispica</i>	○	○
	カラムシ	<i>Boehmeria nivea</i> var. <i>concolor</i>	○	○
	ナンバンカラムシ	<i>Boehmeria nivea</i> var. <i>tenacissima</i>		○
	メヤブマオ	<i>Boehmeria platanifolia</i>	○	
	カテンソウ	<i>Nanocnide japonica</i>	○	
	ミズ	<i>Pilea hamaoi</i>		○
	イラクサ	<i>Urtica thunbergiana</i>		○
タデ科	サクラタデ	<i>Persicaria conspicua</i>	○	
	ホソバイヌタデ	<i>Persicaria erecto-minor</i> var. <i>trigonocarpa</i>	○	
	ヤナギタデ	<i>Persicaria hydropiper</i>	○	○
	シロバナサクラタデ	<i>Persicaria japonica</i>	○	○
	オオイヌタデ	<i>Persicaria lapathifolia</i>	○	○
	イヌタデ	<i>Persicaria longiseta</i>	○	○
	サデクサ	<i>Persicaria maackiana</i>	○	
	イシミカワ	<i>Persicaria perfoliata</i>	○	○
	ママコノシリヌグイ	<i>Persicaria senticosa</i>		○

表-2-2 (2) 植物確認種リスト (2)

科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
タデ科	ミソソバ	<i>Persicaria thunbergii</i>	○	○
	ミチヤナギ	<i>Polygonum aviculare</i>	○	○
	イタドリ	<i>Reynoutria japonica</i>	○	○
	スイバ	<i>Rumex acetosa</i>	○	○
	ヒメスイバ	<i>Rumex acetosella</i>		○
	アレチギシギシ	<i>Rumex conglomeratus</i>	○	○
	ナガバギシギシ	<i>Rumex crispus</i>	○	○
	ギシギシ	<i>Rumex japonicus</i>	○	○
	エゾノギシギシ	<i>Rumex obtusifolius</i>		○
ヤマゴボウ科	ヨウシュヤマゴボウ	<i>Phytolacca americana</i>	○	○
オシロイバナ科	オシロイバナ	<i>Mirabilis jalapa</i>		○
ザクロソウ科	ザクロソウ	<i>Mollugo pentaphylla</i>		○
	クルマバザクロソウ	<i>Mollugo verticillata</i>		○
スベリヒユ科	スベリヒユ	<i>Portulaca oleracea</i>	○	○
ナデシコ科	ノミノツヅリ	<i>Arenaria serpyllifolia</i>		○
	オランダミミナグサ	<i>Cerastium glomeratum</i>	○	○
	コモチナデシコ	<i>Petrorhagia prolifera</i>		○
	ツメクサ	<i>Sagina japonica</i>	○	○
	ムシトリナデシコ	<i>Silene armeria</i>		○
	マンテマ	<i>Silene gallica</i> var. <i>quinquevulnera</i>		○
	ノミノフスマ	<i>Stellaria alsine</i> var. <i>undulata</i>	○	○
	ウシハコベ	<i>Stellaria aquatica</i>	○	○
	コハコベ	<i>Stellaria media</i>	○	○
	ミドリハコベ	<i>Stellaria neglecta</i>	○	○
アカザ科	シロザ	<i>Chenopodium album</i>	○	○
	アカザ	<i>Chenopodium album</i> var. <i>centrorubrum</i>		○
	アリタソウ	<i>Chenopodium ambrosioides</i>	○	
	ケアリタソウ	<i>Chenopodium ambrosioides</i> var. <i>pubescens</i>	○	○
ヒユ科	ヒカゲイノコズチ	<i>Achyranthes bidentata</i> var. <i>japonica</i>	○	○
	ヒナタイノコズチ	<i>Achyranthes bidentata</i> var. <i>tomentosa</i>	○	○
	ホソバツルノゲイトウ	<i>Alternanthera nodiflora</i>	○	○
	ナガエツルノゲイトウ	<i>Alternanthera philoxeroides</i>	○	○
	ツルノゲイトウ	<i>Alternanthera sessilis</i>	○	
	ホソアオゲイトウ	<i>Amaranthus patulus</i>	○	
	アオビユ	<i>Amaranthus viridis</i>		○
	ノゲイトウ	<i>Celosia argentea</i>	○	○
モクレン科	コブシ	<i>Magnolia praecocissima</i>		○
マツブサ科	サネカズラ	<i>Kadsura japonica</i>	○	○
クスノキ科	クスノキ	<i>Cinnamomum camphora</i>	○	○
キンポウゲ科	センニンソウ	<i>Clematis terniflora</i>	○	○
	ケキツネノボタン	<i>Ranunculus cantoniensis</i>		○
	トゲミノキツネノボタン	<i>Ranunculus muricatus</i>		○
	タガラシ	<i>Ranunculus sceleratus</i>	○	○
	キツネノボタン	<i>Ranunculus silerifolius</i>		○
メギ科	ナンテン	<i>Nandina domestica</i>		○
アケビ科	アケビ	<i>Akebia quinata</i>	○	○
	ミツバアケビ	<i>Akebia trifoliata</i>	○	○
ツツラフジ科	アオツツラフジ	<i>Cocculus orbiculatus</i>	○	○
スイレン科	フサジュンサイ	<i>Cabomba caroliniana</i>		○
マツモ科	マツモ	<i>Ceratophyllum demersum</i>		○
ドクダミ科	ドクダミ	<i>Houttuynia cordata</i>	○	○
オトギリソウ科	オトギリソウ	<i>Hypericum erectum</i>		○
ケシ科	クサノオウ	<i>Chelidonium majus</i> var. <i>asiaticum</i>	○	○

表-2-2 (3) 植物確認種リスト (3)

科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
ケシ科	ムラサキケマン	<i>Corydalis incisa</i>	○	
	ナガミヒナゲシ	<i>Papaver dubium</i>	○	○
	ヒナゲシ	<i>Papaver rhoeas</i>	○	
アブラナ科	セイヨウカラシナ	<i>Brassica juncea</i>	○	○
	ナズナ	<i>Capsella bursa-pastoris</i>	○	○
	タネツケバナ	<i>Cardamine flexuosa</i>	○	○
	ミチタネツケバナ	<i>Cardamine hirsuta</i>	○	○
	マメグンバイナズナ	<i>Lepidium virginicum</i>	○	○
	オランダガラシ	<i>Nasturtium officinale</i>	○	
	イヌガラシ	<i>Rorippa indica</i>	○	○
	スカシタゴボウ	<i>Rorippa islandica</i>	○	○
ベンケイソウ科	コモチマンネングサ	<i>Sedum bulbiferum</i>	○	○
	オノマンネングサ	<i>Sedum lineare</i>		○
	メキシコマンネングサ	<i>Sedum mexicanum</i>	○	○
	ツルマンネングサ	<i>Sedum sarmentosum</i>	○	○
	アズマツメクサ	<i>Tillaea aquatica</i>		○
ユキノシタ科	ヤマネコノメソウ	<i>Chrysosplenium japonicum</i>	○	
	ウツギ	<i>Deutzia crenata</i>		○
	タコノアシ	<i>Penthorum chinense</i>		○
バラ科	ヘビイチゴ	<i>Duchesnea chrysantha</i>		○
	ヤブヘビイチゴ	<i>Duchesnea indica</i>		○
	ビワ	<i>Eriobotrya japonica</i>	○	○
	オヘビイチゴ	<i>Potentilla sundaica</i> var. <i>robusta</i>	○	○
	タチバナモドキ	<i>Pyracantha angustifolia</i>	○	
	トキワサンザシ	<i>Pyracantha coccinea</i>		○
	シャリンバイ	<i>Rhaphiolepis umbellata</i>		○
	ノイバラ	<i>Rosa multiflora</i>	○	○
	テリハノイバラ	<i>Rosa wichuraiana</i>	○	○
	クサイチゴ	<i>Rubus hirsutus</i>	○	○
	ニガイチゴ	<i>Rubus microphyllus</i>		○
	ナワシロイチゴ	<i>Rubus parvifolius</i>	○	○
マメ科	クサネム	<i>Aeschynomene indica</i>	○	○
	ネムノキ	<i>Albizia julibrissin</i>		○
	アレチヌスビトハギ	<i>Desmodium paniculatum</i>	○	○
	ツルマメ	<i>Glycine max</i> ssp. <i>soja</i>	○	○
	ヤハズソウ	<i>Kummerowia striata</i>	○	○
	メドハギ	<i>Lespedeza cuneata</i>	○	○
	ミヤコグサ	<i>Lotus corniculatus</i> var. <i>japonicus</i>	○	○
	クズ	<i>Pueraria lobata</i>	○	○
	ハリエンジュ	<i>Robinia pseudoacacia</i>	○	○
	クスダマツメクサ	<i>Trifolium campestre</i>		○
	コメツブツメクサ	<i>Trifolium dubium</i>	○	○
	ムラサキツメクサ	<i>Trifolium pratense</i>	○	○
	シロツメクサ	<i>Trifolium repens</i>	○	○
	ヤハズエンドウ	<i>Vicia angustifolia</i>	○	○
	ナヨクサフジ	<i>Vicia dasycarpa</i> var. <i>glabrescens</i>		○
	スズメノエンドウ	<i>Vicia hirsuta</i>	○	○
	カスマグサ	<i>Vicia tetrasperma</i>	○	○
	ナンテンハギ	<i>Vicia unijuga</i>		○
カタバミ科	イモカタバミ	<i>Oxalis articulata</i>	○	○
	カタバミ	<i>Oxalis corniculata</i>	○	○
	タチカタバミ	<i>Oxalis corniculata</i> f. <i>erecta</i>	○	
	ムラサキカタバミ	<i>Oxalis corymbosa</i>	○	○

表-2-2 (4) 植物確認種リスト (4)

科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
カタバミ科	オッタチカタバミ	<i>Oxalis stricta</i>	○	○
フウロソウ科	アメリカフウロ	<i>Geranium carolinianum</i>	○	○
トウダイグサ科	エノキグサ	<i>Acalypha australis</i>	○	○
	オオニシキソウ	<i>Euphorbia maculata</i>	○	○
	ニシキソウ	<i>Euphorbia pseudochamaesyce</i>	○	
	コニシキソウ	<i>Euphorbia supina</i>	○	○
	アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i>	○	○
	ナンキンハゼ	<i>Sapium sebiferum</i>	○	○
ミカン科	カラタチ	<i>Poncirus trifoliata</i>	○	
ニガキ科	シンジュ	<i>Ailanthus altissima</i>		○
センダン科	センダン	<i>Melia azedarach</i>	○	○
ウルシ科	ヌルデ	<i>Rhus javanica</i> var. <i>roxburgii</i>	○	○
	ハゼノキ	<i>Rhus succedanea</i>		○
	ヤマハゼ	<i>Rhus sylvestris</i>	○	
カエデ科	イロハモミジ	<i>Acer palmatum</i>		○
ニシキギ科	ツルウメモドキ	<i>Celastrus orbiculatus</i>		○
	マユミ	<i>Euonymus sieboldianus</i>		○
クロウメモドキ科	ナツメ	<i>Zizyphus jujuba</i>		○
ブドウ科	ノブドウ	<i>Ampelopsis glandulosa</i> var. <i>heterophylla</i>	○	○
	ヤブガラシ	<i>Cayratia japonica</i>	○	○
	エビヅル	<i>Vitis ficifolia</i> var. <i>lobata</i>		○
アオイ科	フヨウ	<i>Hibiscus mutabilis</i>	○	
	ムクゲ	<i>Hibiscus syriacus</i>	○	○
グミ科	ナワシログミ	<i>Elaeagnus pungens</i>	○	○
	アキグミ	<i>Elaeagnus umbellata</i>	○	○
スミレ科	スミレ	<i>Viola mandshurica</i>	○	
ミゾハコベ科	ミゾハコベ	<i>Elatine triandra</i> var. <i>pedicellata</i>		○
ウリ科	ゴキヅル	<i>Actinostemma lobatum</i>	○	○
	アマチャヅル	<i>Gynostemma pentaphyllum</i>		○
	スズメウリ	<i>Melothria japonica</i>	○	○
	アレチウリ	<i>Sicyos angulatus</i>	○	○
	カラスウリ	<i>Trichosanthes cucumeroides</i>	○	○
	キカラスウリ	<i>Trichosanthes kirilowii</i> var. <i>japonica</i>	○	
ミソハギ科	ホソバヒメミソハギ	<i>Ammannia coccinea</i>		○
ヒシ科	ヒシ	<i>Trapa japonica</i>		○
アカバナ科	アメリカミズキンバイ	<i>Ludwigia decurrens</i>	○	○
	チョウジタデ	<i>Ludwigia epilobioides</i>	○	○
	メマツヨイグサ	<i>Oenothera biennis</i>	○	○
	コマツヨイグサ	<i>Oenothera laciniata</i>	○	○
	アレチマツヨイグサ	<i>Oenothera parviflora</i>	○	
	ユウゲシヨウ	<i>Oenothera rosea</i>		○
	ヒルザキツキミノソウ	<i>Oenothera speciosa</i>		○
アリノトウグサ科	オオフサモ	<i>Myriophyllum brasiliense</i>	○	○
	ホザキノフサモ	<i>Myriophyllum spicatum</i>		○
ミズキ科	アオキ	<i>Aucuba japonica</i>		○
ウコギ科	メダラ	<i>Aralia elata</i> var. <i>subinermis</i>		○
	カミヤツデ	<i>Tetrapanax papyriferus</i>	○	
セリ科	ノハラジャク	<i>Anthriscus vulgaris</i>		○
	ハナウド	<i>Heracleum nipponicum</i>	○	○
	ノチドメ	<i>Hydrocotyle maritima</i>		○
	オオチドメ	<i>Hydrocotyle ramiflora</i>	○	
	セリ	<i>Oenanthe javanica</i>	○	○
	ヤブジラミ	<i>Torilis japonica</i>		○

表-2-2 (5) 植物確認種リスト (5)

科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
セリ科	オヤブジラミ	<i>Torilis scabra</i>		○
ヤブコウジ科	マンリョウ	<i>Ardisia crenata</i>	○	○
サクラソウ科	コナスビ	<i>Lysimachia japonica f. subsessilis</i>	○	
カキノキ科	カキノキ	<i>Diospyros kaki</i>	○	○
モクセイ科	ネズミモチ	<i>Ligustrum japonicum</i>		○
	トウネズミモチ	<i>Ligustrum lucidum</i>	○	○
	イボタノキ	<i>Ligustrum obtusifolium</i>		○
	セイヨウイボタ	<i>Ligustrum vulgare</i>	○	
リンドウ科	ベニバナセンプリ	<i>Centaurium erythraea</i>	○	
	ハナハマセンプリ	<i>Centaurium pulchellum</i>	○	
ミツガシワ科	アサザ	<i>Nymphoides peltata</i>		○
キョウチクトウ科	テイカカズラ	<i>Trachelospermum asiaticum f. intermedium</i>	○	
ガガイモ科	ガガイモ	<i>Metaplexis japonica</i>	○	○
アカネ科	オオフタバムグラ	<i>Diodia teres</i>		○
	ヤエムグラ	<i>Galium spurium var. echinospermon</i>	○	○
	カワラマツバ	<i>Galium verum var. asiaticum f. nikkoense</i>		○
	ヘクソカズラ	<i>Paederia scandens</i>	○	○
ヒルガオ科	コヒルガオ	<i>Calystegia hederacea</i>		○
	ヒルガオ	<i>Calystegia japonica</i>	○	○
	アメリカネナシカズラ	<i>Cuscuta pentagona</i>		○
	マメアサガオ	<i>Ipomoea lacunosa</i>	○	○
	ホシアサガオ	<i>Ipomoea triloba</i>	○	
ムラサキ科	ハナイバナ	<i>Bothriospermum tenellum</i>		○
	キュウリグサ	<i>Trigonotis peduncularis</i>	○	○
クマツヅラ科	ヤナギハナガサ	<i>Verbena bonariensis</i>		○
	アレチハナガサ	<i>Verbena brasiliensis</i>	○	○
	ダキバアレチハナガサ	<i>Verbena incompta</i>		○
アワゴケ科	アメリカアワゴケ	<i>Callitriche terrestris</i>		○
	ミズハコベ	<i>Callitriche verna</i>	○	○
シソ科	トウバナ	<i>Clinopodium gracile</i>	○	○
	カキドオシ	<i>Glechoma hederacea var. grandis</i>	○	○
	ホトケノザ	<i>Lamium amplexicaule</i>	○	○
	オドリコソウ	<i>Lamium barbatum</i>	○	
	ヒメオドリコソウ	<i>Lamium purpureum</i>	○	○
	メハジキ	<i>Leonurus japonicus</i>	○	○
	シロネ	<i>Lycopus lucidus</i>		○
	ヒメジソ	<i>Mosla dianthera</i>	○	○
	イヌコウジュ	<i>Mosla punctulata</i>	○	○
	レモンエゴマ	<i>Perilla frutescens var. citriodora</i>	○	
	ミゾコウジュ	<i>Salvia plebeia</i>		○
	ニガクサ	<i>Teucrium japonicum</i>		○
ナス科	クコ	<i>Lycium chinense</i>	○	○
	アメリカイヌホオズキ	<i>Solanum americanum</i>	○	○
	ヒヨドリジョウゴ	<i>Solanum lyratum</i>	○	
	オオイヌホオズキ	<i>Solanum nigrescens</i>	○	
	イヌホオズキ	<i>Solanum nigrum</i>	○	○
ゴマノハグサ科	マツバウンラン	<i>Linaria canadensis</i>	○	○
	タケトアゼナ	<i>Lindernia dubia ssp. dubia</i>	○	
	アメリカアゼナ	<i>Lindernia dubia ssp. major</i>		○
	アゼナ	<i>Lindernia procumbens</i>		○
	ムラサキサギゴケ	<i>Mazus miquelii</i>	○	○
	トキワハゼ	<i>Mazus pumilus</i>	○	○
	オオカワヂシャ	<i>Veronica anagallis-aquatica</i>	○	○

表-2-2 (6) 植物確認種リスト (6)

科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
ゴマノハグサ科	タチイヌノフグリ	<i>Veronica arvensis</i>	○	○
	フラサバソウ	<i>Veronica hederifolia</i>	○	○
	ムシクサ	<i>Veronica peregrina</i>	○	○
	オオイヌノフグリ	<i>Veronica persica</i>	○	○
	カワヂシャ	<i>Veronica undulata</i>		○
キツネノマゴ科	キツネノマゴ	<i>Justicia procumbens</i>	○	○
オオバコ科	オオバコ	<i>Plantago asiatica</i>	○	○
	ヘラオオバコ	<i>Plantago lanceolata</i>	○	○
	タチオオバコ	<i>Plantago virginica</i>		○
スイカズラ科	スイカズラ	<i>Lonicera japonica</i>		○
オミナエシ科	ノヂシャ	<i>Valerianella olitoria</i>	○	○
キキョウ科	ミゾカクシ	<i>Lobelia chinensis</i>		○
	ヒナキキョウソウ	<i>Specularia biflora</i>		○
	キキョウソウ	<i>Specularia perfoliata</i>		○
キク科	ブタクサ	<i>Ambrosia artemisiifolia</i> var. <i>elator</i>	○	○
	オオブタクサ	<i>Ambrosia trifida</i>	○	○
	クソニンジン	<i>Artemisia annua</i>	○	○
	カワラニンジン	<i>Artemisia apiacea</i>	○	
	カワラヨモギ	<i>Artemisia capillaris</i>	○	○
	ヨモギ	<i>Artemisia indica</i> var. <i>maximowiczii</i>	○	○
	ヒロハホウキギク	<i>Aster subulatus</i> var. <i>ligulatus</i>	○	○
	ホウキギク	<i>Aster subulatus</i> var. <i>sandwicensis</i>	○	
	センダングサ	<i>Bidens biternata</i>	○	
	アメリカセンダングサ	<i>Bidens frondosa</i>	○	○
	コセンダングサ	<i>Bidens pilosa</i>	○	○
	ヒレアザミ	<i>Carduus crispus</i>		○
	ヤグルマギク	<i>Centaurea cyanus</i>		○
	トキンソウ	<i>Centipeda minima</i>		○
	フランスギク	<i>Chrysanthemum leucanthemum</i>		○
	ノアザミ	<i>Cirsium japonicum</i>		○
	アレチノギク	<i>Conyza bonariensis</i>		○
	オオアレチノギク	<i>Conyza sumatrensis</i>	○	○
	オオキンケイギク	<i>Coreopsis lanceolata</i>		○
	アメリカタカサブロウ	<i>Eclipta alba</i>	○	
	タカサブロウ	<i>Eclipta prostrata</i>	○	○
	ヒメムカシヨモギ	<i>Erigeron canadensis</i>	○	○
	ハハコグサ	<i>Gnaphalium affine</i>	○	○
	タチチコグサ	<i>Gnaphalium calviceps</i>		○
	チコグサモドキ	<i>Gnaphalium pennsylvanicum</i>		○
	ウラジロチコグサ	<i>Gnaphalium spicatum</i>		○
	ミズヒマワリ	<i>Gymnocoronis spilanthoides</i>	○	
	キツネアザミ	<i>Hemistepta lyrata</i>	○	○
	ブタナ	<i>Hypochoeris radicata</i>		○
	オオヂシバリ	<i>Ixeris debilis</i>		○
	ニガナ	<i>Ixeris dentata</i>		○
	ヨメナ	<i>Kalimeris yomena</i>	○	○
	アキノノゲシ	<i>Lactuca indica</i>	○	○
	ホソバアキノノゲシ	<i>Lactuca indica</i> f. <i>indivisa</i>		○
	トゲチシャ	<i>Lactuca scariola</i>		○
	コオニタビラコ	<i>Lapsana apogonoides</i>	○	○
	ヤブタビラコ	<i>Lapsana humilis</i>		○
	カミツレ	<i>Matricaria chamomilla</i>		○
	フキ	<i>Petasites japonicus</i>		○

表-2-2(7) 植物確認種リスト(7)

科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
キク科	コウゾリナ	<i>Picris hieracioides</i> var. <i>glabrescens</i>		○
	ノボロギク	<i>Senecio vulgaris</i>	○	○
	メナモミ	<i>Siegesbeckia orientalis</i> ssp. <i>pubescens</i>	○	
	セイトカアワダチソウ	<i>Solidago altissima</i>	○	○
	オニノゲシ	<i>Sonchus asper</i>		○
	ノゲシ	<i>Sonchus oleraceus</i>	○	○
	ヒメジョオン	<i>Stenactis annuus</i>	○	○
	ヘラバヒメジョオン	<i>Stenactis strigosus</i>	○	
	カンサイタンポポ	<i>Taraxacum japonicum</i>	○	○
	セイウタンポポ	<i>Taraxacum officinale</i>	○	○
	イガオナモミ	<i>Xanthium italicum</i>	○	
	オオオナモミ	<i>Xanthium occidentale</i>	○	○
	オニタビラコ	<i>Youngia japonica</i>	○	○
トチカガミ科	オオカナダモ	<i>Egeria densa</i>	○	○
	コカナダモ	<i>Elodea nuttallii</i>		○
ヒルムシロ科	エビモ	<i>Potamogeton crispus</i>		○
	ホソバミズヒキモ	<i>Potamogeton octandrus</i>		○
	ヤナギモ	<i>Potamogeton oxyphyllus</i>		○
ユリ科	ノビル	<i>Allium grayi</i>	○	○
	ヤブカンゾウ	<i>Hemerocallis fulva</i> var. <i>kwanso</i>	○	○
	シンテッポウユリ	<i>Lilium x formolongo</i>	○	
	ヤブラン	<i>Liriope muscari</i>		○
	ジャノヒゲ	<i>Ophiopogon japonicus</i>		○
ヒガンバナ科	ヒガンバナ	<i>Lycoris radiata</i>	○	
	タマスダレ	<i>Zephyranthes candida</i>		○
ヤマノイモ科	ナガイモ	<i>Dioscorea batatas</i>		○
	ニガカシュウ	<i>Dioscorea bulbifera</i>	○	○
	ヤマノイモ	<i>Dioscorea japonica</i>	○	
	オニドコロ	<i>Dioscorea tokoro</i>	○	○
アヤメ科	キシウブ	<i>Iris pseudacorus</i>		○
	ニワゼキショウ	<i>Sisyrinchium atlanticum</i>		○
イグサ科	ヒメコウガイゼキショウ	<i>Juncus bufonius</i>		○
	イ	<i>Juncus effusus</i> var. <i>decipiens</i>	○	○
	コウガイゼキショウ	<i>Juncus leschenaultii</i>		○
	ホソイ	<i>Juncus setchuensis</i> var. <i>effusoides</i>		○
	クサイ	<i>Juncus tenuis</i>	○	○
	コゴメイ	<i>Juncus</i> sp.	○	
	スズメノヤリ	<i>Luzula capitata</i>		○
ツユクサ科	ツユクサ	<i>Commelina communis</i>	○	○
	ノハカタカラクサ	<i>Tradescantia flumiensis</i>	○	
イネ科	アオカモジグサ	<i>Agropyron racemiferum</i>		○
	カモジグサ	<i>Agropyron tsukushiense</i> var. <i>transiens</i>		○
	ハナヌカススキ	<i>Aira elegans</i>		○
	スズメノテッポウ	<i>Alopecurus aequalis</i>	○	○
	メリケンカルカヤ	<i>Andropogon virginicus</i>	○	○
	カラスムギ	<i>Avena fatua</i>	○	○
	ミノゴメ	<i>Beckmannia syzigachne</i>	○	○
	コバンソウ	<i>Briza maxima</i>		○
	ヒメコバンソウ	<i>Briza minor</i>		○
	イヌムギ	<i>Bromus catharticus</i>	○	○
	スズメノチャヒキ	<i>Bromus japonicus</i>		○
	キツネガヤ	<i>Bromus pauciflorus</i>		○
	ジュズダマ	<i>Coix lacryma-jobi</i>	○	

表-2-2 (8) 植物確認種リスト (8)

科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
イネ科	ギョウギシバ	<i>Cynodon dactylon</i>	○	○
	メヒシバ	<i>Digitaria ciliaris</i>	○	○
	コメヒシバ	<i>Digitaria radicata</i>	○	
	アキメヒシバ	<i>Digitaria violascens</i>	○	
	イヌビエ	<i>Echinochloa crus-galli</i>	○	○
	ケイヌビエ	<i>Echinochloa crus-galli</i> var. <i>echinata</i>		○
	オヒシバ	<i>Eleusine indica</i>	○	○
	シナダレスズメガヤ	<i>Eragrostis curvula</i>	○	○
	カゼクサ	<i>Eragrostis ferruginea</i>		○
	コゴメカゼクサ	<i>Eragrostis japonica</i>	○	
	コスズメガヤ	<i>Eragrostis poaeoides</i>		○
	ウシノシッペイ	<i>Hemarthria sibirica</i>		○
	チガヤ	<i>Imperata cylindrica</i> var. <i>koenigii</i>	○	○
	ネズミムギ	<i>Lolium multiflorum</i>	○	○
	ホソムギ	<i>Lolium perenne</i>		○
	オギ	<i>Miscanthus sacchariflorus</i>	○	○
	ススキ	<i>Miscanthus sinensis</i>	○	○
	ケチヂミザサ	<i>Oplismenus undulatifolius</i>	○	
	コチヂミザサ	<i>Oplismenus undulatifolius</i> var. <i>japonicus</i>	○	○
	ヌカキビ	<i>Panicum bisulcatum</i>	○	○
	オオクサキビ	<i>Panicum dichotomiflorum</i>	○	○
	シマスズメノヒエ	<i>Paspalum dilatatum</i>	○	○
	キシウスズメノヒエ	<i>Paspalum distichum</i>		○
	タチスズメノヒエ	<i>Paspalum urvillei</i>	○	○
	クサヨシ	<i>Phalaris arundinacea</i>		○
	ヨシ	<i>Phragmites australis</i>	○	○
	ツルヨシ	<i>Phragmites japonica</i>		○
	セイタカヨシ	<i>Phragmites karka</i>	○	○
	マダケ	<i>Phyllostachys bambusoides</i>		○
	ハチク	<i>Phyllostachys nigra</i> var. <i>henonis</i>		○
	ネザサ	<i>Pleioblastus chino</i> var. <i>viridis</i>		○
	メダケ	<i>Pleioblastus simonii</i>		○
	スズメノカタビラ	<i>Poa annua</i>		○
	ナガハグサ	<i>Poa pratensis</i>	○	○
	イチゴツナギ	<i>Poa sphondylodes</i>		○
	オオスズメノカタビラ	<i>Poa trivialis</i>		○
	タマオオスズメノカタビラ	<i>Poa trivialis</i> subsp. <i>sylvicola</i>		○
	ヒエガエリ	<i>Polypogon fugax</i>		○
	アキノエノコログサ	<i>Setaria faberi</i>	○	○
	コツブキンエノコロ	<i>Setaria pallide-fusca</i>	○	○
	キンエノコロ	<i>Setaria pumilla</i>		○
	エノコログサ	<i>Setaria viridis</i>		○
	セイバンモロコシ	<i>Sorghum halepense</i>	○	○
	ヒメモロコシ	<i>Sorghum halepense</i> f. <i>muticum</i>	○	
	カニツリグサ	<i>Trisetum bifidum</i>		○
	ナギナタガヤ	<i>Vulpia myuros</i>		○
	マコモ	<i>Zizania latifolia</i>	○	○
	シバ	<i>Zoysia japonica</i>		○
ヤシ科	シュロ	<i>Trachycarpus fortunei</i>	○	○
サトイモ科	ショウブ	<i>Acorus calamus</i>		○
ウキクサ科	ウキクサ	<i>Spirodela polyrrhiza</i>		○
ガマ科	ヒメガマ	<i>Typha angustifolia</i>	○	○
カヤツリグサ科	アオスゲ	<i>Carex breviculmis</i>		○

表-2-2 (9) 植物確認種リスト (9)

科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
カヤツリグサ科	アゼナルコ	<i>Carex dimorpholepis</i>	○	○
	カサスゲ	<i>Carex dispalata</i>	○	○
	シラスゲ	<i>Carex doniana</i>		○
	ヤガミスゲ	<i>Carex maackii</i>	○	○
	ヌカスゲ	<i>Carex mitrata</i>		○
	ミコシガヤ	<i>Carex neurocarpa</i>		○
	タカネマスクサ	<i>Carex planata</i>		○
	コウボウシバ	<i>Carex pumila</i>		○
	ヤワラスゲ	<i>Carex transversa</i>		○
	クゲガヤツリ	<i>Cyperus compressus</i>	○	
	ホソミキンガヤツリ	<i>Cyperus engelmannii</i>	○	
	メリケンガヤツリ	<i>Cyperus eragrostis</i>	○	○
	コゴメガヤツリ	<i>Cyperus iria</i>	○	○
	カヤツリグサ	<i>Cyperus microiria</i>	○	○
	アオガヤツリ	<i>Cyperus nipponicus</i>	○	
	ヒデリコ	<i>Fimbristylis miliacea</i>	○	
99科440種			278	374

2. 淡水魚等水辺の生物

調査は市民調査、専門調査合同で実施し、表-2-3に示す合計2科16種の魚類を確認した。

捕獲個体総数は1504個体とかなり多いが、これは地引網を用いたためである。

確認された魚類の大部分はフナ類やコウライニゴイの幼魚であった。調査地の樋之上ワンドをはじめワンドは一般的に淀川本流よりも浅く、流れがほとんどないため、幼魚や止水域を好む魚にとって重要な環境として利用されている。調査地の樋之上ワンドも幼魚が多いことからこれらの重要な生息環境として利用されていると考えられるが、水際の植生等がほとんど見られないため、産卵環境としては不十分と考えられ、幼魚等の一時的な生息環境としての利用が主体であると考えられる。

表-2-3 淡水魚確認種一覧表

科名	種 名	確認個体数
コイ科	コイ	21
	ゲンゴロウブナ	4
	フナ類	254
	カネヒラ	2
	タイリクバラタナゴ	2
	ワタカ	1
	ハス	3
	オイカワ	1
	モツゴ	32
	タモロコ	9
	ゼゼラ	21
	カマツカ	4
	コウライニゴイ	1080
	コウライモロコ	50
サンフィッシュ科	ブルーギル	15
	オオクチバス(ブラックバス)	5
2科16種		



調査地(樋之上ワンド)の概観

次に、今回の調査結果について河川水辺の国勢調査において淀川水系で確認されている種と比較を行った(表-2-4)。その結果、全般的に樋之上ワンドでの確認種は周辺の地点と類似した魚類相であったが、その魚類相の分布傾向からみて枚方市域の淀川は下流域の都市河川の魚類相とやや清涼な水質を好む中上流域の魚類相の境界付近に当たることが推察された。

表-2-4 今回の調査結果と淀川水系の魚類相との比較

地 点	淀川	淀川	淀川	種	淀川	宇治川	桂川	桂川	木津川	木津川	木津川
	1	2	3	之上ワンド	4	1	1	2	1	2	3
	河川名	城北	出口	ー	三川合流	隠元橋	宮前橋	嵐山	八幡	山城大橋	笠置
	市町村名	大阪市	守口市	枚方市	八幡市	宇治市	京都市	八幡市	八幡市	城陽市	笠置町
河川からの距離	3	12	23.5	31.4	35.2	47.5	2.4	17.5	1.8	13.4	37
生息環境	生活型	種 名									
遊泳魚	汽水・海水魚	カサギイワシ	●								
遊泳魚	汽水・海水魚	キナ	●								
遊泳魚	汽水・海水魚	クロダイ	●								
遊泳魚	汽水・海水魚	コノシロ	●								
遊泳魚	汽水・海水魚	サッパ	●								
遊泳魚	汽水・海水魚	スズキ	●								
遊泳魚	汽水・海水魚	セシボウ	●								
遊泳魚	汽水・海水魚	ヒイナギ	●								
遊泳魚	汽水・海水魚	ヒメハセ	●								
遊泳魚	汽水・海水魚	ボウ	●								
底生魚	汽水・海水魚	マハセ	●								
遊泳魚	汽水・海水魚	メダ	●								
底生魚	両側回遊魚	チフ	●								
底生魚	両側回遊魚	ウロハセ	●								
遊泳魚	両側回遊魚	ワカサギ		●							
遊泳魚	汽水・海水魚	チカダイ		●							
底生魚	両側回遊魚	ヌマチフ	●		●	●	●	●	●	●	●
底生魚	両側回遊魚	トウヨシホリ		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	カサギ		●	●		●				
底生魚	純淡水魚	カムルチー		●	●				●	●	
遊泳魚	純淡水魚	ワカ		●	●	●					
底生魚	純淡水魚	セセウ		●	●	●				●	
底生魚	純淡水魚	コイ		●	●	●	●	●	●	●	
遊泳魚	純淡水魚	ハス		●	●	●			●		
遊泳魚	純淡水魚	ブラックバス		●	●	●			●	●	●
底生魚	純淡水魚	コイ(コウライゴイ)		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	Carassius属の一種(ゲンゴロウナ)		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	オイカワ		●	●	●	●	●	●	●	●
底生魚	純淡水魚	カマツカ		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	コウライモロコ		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	ブルーギル		●	●	●	●	●	●	●	●
底生魚	純淡水魚	ギギ		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	モツコ		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	タイリクバラナグ		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	両側回遊魚	アユ		●	●	●	●	●	●	●	●
底生魚	純淡水魚	ドンコ		●	●	●	●	●	●	●	●
底生魚	純淡水魚	ナマス		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	カネヒラ		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	タモロコ		●	●	●	●	●	●	●	●
底生魚	純淡水魚	ビワコオナマス		●	●	●	●	●	●	●	●
底生魚	純淡水魚	スジマシヨウ中型種		●	●	●	●	●	●	●	●
底生魚	純淡水魚	カヨシホリ		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	カラムツA型		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	カラムツB型		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	アブラボテ		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	ムツク		●	●	●	●	●	●	●	●
底生魚	降海魚	ウナギ		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	カワカキ		●	●	●	●	●	●	●	●
遊泳魚	純淡水魚	シロヒメウ		●	●	●	●	●	●	●	●

出典：河川水辺の国勢調査(1999年)データ(国土交通省河川環境データベース)

●	汽水域に生息する種
●	回遊を行っている種
●	淡水区域に普遍的傾向を示す種
●	上流域に偏在傾向を示す種

3. 陸上昆虫類

陸上昆虫類は15目118科316種が確認された。確認種の目別種数をみると、表-2-5に示したとおりコウチュウ目(ベイトトラップによる)、カメムシ目、バッタ目、チョウ目が多く、河川という草地の多い開放的な環境を反映した結果となっている。

調査区域である淀川河川敷には、ヤナギやニレを中心とした河畔林が帯状に存在し、樹林性の昆虫類が豊富にみられた。また、ススキ、セイタカアワダチソウなどの高茎草地やシバなどに代表される低茎草地もパッチ状に存在している。

河川敷を昆虫類の生息環境別に大まかに分類すると、砂礫地や湿生草地などの水辺の環境、草地環境、樹林環境がみられた。

水辺ではオオハサミムシ、エリザハンミョウ、コハンミョウ、カワチマルクビゴミムシなど砂礫地に特有な種やアオモンイトトンボ、ハグロトンボ、ギンヤンマなどのトンボ類が確認された。湿生草地ではコバネイナゴ、トゲヒシバ、ハネナガヒシバなどのバッタ類やアオバアリガタハネカクシ、ミイデラゴミムシ、キアシスレチゴミムシなどが確認された。

高茎草地ではキリギリス、ウマオイ、スズムシなどバッタ類やアワダチソウグンバイが多くみられた。また地上部ではオオサカヒラタシデムシ、ツチカメムシなどが確認された。

低茎草地ではハラヒシバ、コケシマグソコガネ、コスナゴミムシダマシなどが確認された。

樹林地では樹上に生息するクマゼミ、アブラゼミなどのセミ類、コムラサキ、ゴマダラチョウなどのチョウ類、コクワガタ、シロテンハナムグリ、ヤマトタムシなどの甲虫類が確認された。樹林地の地上部ではヤコンオサムシ、オオクロツヤヒラタゴミムシ、モリチャバネゴキブリなどが確認された。

希少な種としてはオオサカヒラタシデムシ(大阪府レッドデータブックの準絶滅危惧種)が確認された。ススキ・セイタカアワダチソウ草地で実施したベイトトラップで確認している。

表-2-5 目別確認種数

目 名	種 数
クモ目	5
トビムシ目	4
トンボ目	10
ゴキブリ目	2
カマキリ目	4
ハサミムシ目	2
バッタ目	41
カメムシ目	47
アミメカゲロウ目	2
シリアゲムシ目	1
トビケラ目	1
チョウ目	42
ハエ目	11
コウチュウ目	114
ハチ目	30
15	316

表-2-6(1) 陸上昆虫類確認種一覧表(1)

目 名	科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
クモ目	タナグモ科	クサグモ	<i>Agelena limbata</i>	○	
	コガネグモ科	ナガコガネグモ	<i>Argiope bruennichii</i>	○	
	アシナガグモ科	ジョロウグモ	<i>Nephila clavata</i>	○	
		アシナガグモ	<i>Tetragnatha praedonia</i>	○	
	ヒメグモ科	オナガグモ	<i>Argyrodes cylindrogaster</i>	○	
トビムシ目(粘管目)	ミストビムシ科	ミストビムシ科	Poduridae		○
	アヤトビムシ科	アヤトビムシ科	Entomobryidae		○
	ツチトビムシ科	ツチトビムシ科	Isotomidae		○
	マルトビムシ科	マルトビムシ科	Sminthuridae		○
トンボ目(蜻蛉目)	イトトンボ科	アオモンイトトンボ	<i>Ischnura senegalensis</i>	○	○
	カワトンボ科	ハグロトンボ	<i>Calopteryx atrata</i>	○	○
	ヤンマ科	キンヤンマ	<i>Anax parthenope</i>	○	
	トンボ科	コフキトンボ	<i>Deielia phaon</i>		○
		シオカラトンボ	<i>Orthetrum albistylum speciosum</i>	○	○
		ウスバキトンボ	<i>Pantala flavescens</i>	○	○
		コシアキトンボ	<i>Pseudothemis zonata</i>		○
		ナツアカネ	<i>Sympetrum darwinianum</i>	○	○
		アキアカネ	<i>Sympetrum frequens</i>	○	○
		リスアカネ	<i>Sympetrum risi risi</i>	○	
コキフリ目(網翅目)	チャバネコキフリ科	モリチャバネコキフリ	<i>Blattella nipponica</i>		○
		チャバネコキフリ科	Blattellidae		○
カマキリ目(蟷螂目)	カマキリ科	ハラビロカマキリ	<i>Hierodula patellifera</i>	○	○
		コカマキリ	<i>Statilia maculata</i>	○	
		チョウセンカマキリ	<i>Tenodera angustipennis</i>	○	
		オオカマキリ	<i>Tenodera aridifolia</i>	○	○
		ヒゲシロハサミムシ	<i>Gonolabis marginalis</i>		○
ハサミムシ目(革翅目)	オオハサミムシ科	オオハサミムシ	<i>Labidura riparia</i>		○
ハツタ目(直翅目)	キリギリス科	コハネヒメキス	<i>Chizuella bonneti</i>	○	
		ウスイロササキリ	<i>Conocephalus chinensis</i>	○	
		ホシササキリ	<i>Conocephalus maculatus</i>	○	
		Conocephalus属の一種	<i>Conocephalus sp.</i>		○
		セスジツユムシ	<i>Ducetia japonica</i>	○	
		ヒメキス	<i>Eobiana engelhardti</i>	○	
		クビキリキス	<i>Euconocephalus varius</i>	○	○
		キリギリス	<i>Gampsocleis buergeri</i>	○	
		ウマオイ	<i>Hexacentrus japonicus</i>	○	
		ツユムシ	<i>Phaneroptera falcata</i>	○	○
	ケラ科	ケラ	<i>Gryllotalpa africana</i>		○
	コオロギ科	マダラス	<i>Dianemobius fascipes</i>		○
		シバズ	<i>Dianemobius mikado</i>	○	○
		スズムシ	<i>Homoeogryllus japonicus</i>		○
		ハラオカメコオロギ	<i>Loxoblemmus campestris</i>	○	○
		ミツカトコオロギ	<i>Loxoblemmus doenitzi</i>		○
		Loxoblemmus属の一種	<i>Loxoblemmus sp.</i>		○
		クマコオロギ	<i>Modicogryllus minor</i>		○
		カンタン	<i>Oecanthus longicaudus</i>	○	○
		ヒロハネカンタン	<i>Oecanthus sp.</i>	○	
		クサヒバリ	<i>Paratrigonidium bifasciatum</i>	○	
		エゾスズ	<i>Pteronemobius nitidus</i>	○	
		エンマコオロギ	<i>Teleogryllus emma</i>	○	○
		ツツレサセコオロギ	<i>Velarifictorus mikado</i>	○	
		コオロギ科	Gryllidae		○
	クサヒバリ科	カヤヒバリ	<i>Anaxipha sp.</i>	○	
		キアシヒバリモドキ	<i>Trigonidium haani</i>	○	
	カネタタキ科	カネタタキ	<i>Ornebius kanetataki</i>	○	
	ハツタ科	ショウリョウハツタ	<i>Acrida cinerea</i>	○	○
		マダラハツタ	<i>Aiolopus tamulus</i>	○	
		トノサマハツタ	<i>Locusta migratoria</i>	○	○
		クルマハツタモドキ	<i>Oedaleus infernalis</i>	○	○
		コハネイナゴ	<i>Oxya vezoensis</i>	○	○
		ツチイナゴ	<i>Patanga japonica</i>	○	
	オンブハツタ科	オンブハツタ	<i>Atractomorpha lata</i>	○	○

表-2-6(2) 陸上昆虫類確認種一覧表(2)

目 名	科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
ハッ目(直翅目)	ヒシハッ科	トケヒシハッ	<i>Criotettix japonicus</i>	○	
		ハネナガヒシハッ	<i>Euparatettix insularis</i>		○
		ハラヒシハッ	<i>Tetrix japonica</i>		○
		Tetrix属の一種	<i>Tetrix</i> sp.		○
		ヒシハッ科	Tetrigidae	○	
	ハミハッ科	ハミハッ	<i>Xya japonica</i>		○
カメシ目(半翅目)	アオハハコロモ科	トビイロハコロモ	<i>Mimophantia maritima</i>	○	
	ゲンバイウナカ科	ヒラタゲンバイウナカ	<i>Ossoides lineatus</i>	○	
	セミ科	クマゼミ	<i>Cryptotympana facialis</i>	○	○
		アブラゼミ	<i>Graptopsaltria nigrofuscata</i>	○	○
		ツクツクホウシ	<i>Meimuna opalifera</i>	○	
		ニイニイゼミ	<i>Platypleura kaempferi</i>		○
	ツノゼミ科	ツノゼミ	<i>Butragulus flavipes</i>	○	
		トビイロツノゼミ	<i>Machaerotypus sibiricus</i>	○	
	アワフキムシ科	ハマヘアワフキ	<i>Aphrophora maritima</i>	○	
		アワフキムシ科	Aphrophoridae	○	
	ヨコバイ科	Pagaronia属の一種	<i>Pagaronia</i> sp.	○	
		ホシヨコバイ	<i>Xestocephalus japonicus</i>		○
		ヨコバイ科	Cicadellidae	○	
	アブラムシ科	アブラムシ科	Aphididae		○
	サシガメ科	アカシマサシガメ	<i>Haematoloecha nigrorufa</i>		○
		トビイロサシガメ	<i>Oncocephalus assimilis</i>		○
		クロモンサシガメ	<i>Peirates turpis</i>	○	○
		カスミカメシ科	<i>Stenodema calcarata</i>		
	ゲンバウムシ科	カスミカメシ科	Miridae		○
		ウチワゲンバイ	<i>Cantacader lethierryi</i>		○
		ヘクソカスラゲンバイ	<i>Dictyla formosa</i>	○	
		アワダチソウゲンバイ	<i>Corythucha marmorata</i>	○	○
	ホシカメシ科	ホシカメシ科	Pyrrhocoridae	○	
	ホソヘリカメシ科	ホソヘリカメシ	<i>Riptortus clavatus</i>	○	
	ヘリカメシ科	ホオスキカメシ	<i>Acanthocoris sordidus</i>	○	
		ホソヘリカメシ	<i>Cletus punctiger</i>	○	○
		ホシハラビロヘリカメシ	<i>Homoeocerus unipunctatus</i>	○	
		オオツマキヘリカメシ	<i>Hygia lativentris</i>		○
		ヒメヘリカメシ科	<i>Rhopalus maculatus</i>	○	
	イトカメシ科	フチヒゲヒメヘリカメシ	<i>Stictopleurus punctatonevrosus</i>	○	
		イトカメシ	<i>Yemma exilis</i>	○	
	ナガカメシ科	クロナガカメシ	<i>Drymus marginatus</i>		○
		オオモンシロナガカメシ	<i>Metochus abbreviatus</i>		○
		ヒメナガカメシ	<i>Nysius plebeius</i>		○
		ヒゲナガカメシ	<i>Pachygrontha antennata</i>	○	○
		オオメナガカメシ	<i>Picoris varius</i>	○	○
		ジウジンナガカメシ	<i>Tropidothorax cruciger</i>	○	
		メダカナガカメシ科	<i>Chauliops fallax</i>	○	
	ツチカメシ科	ツチカメシ	<i>Macroscytus japonensis</i>		○
	カメシ科	ウスラカメシ	<i>Aelia fieberi</i>	○	○
		フチヒゲカメシ	<i>Dolycoris baccarum</i>	○	
		マルシラホシカメシ	<i>Eysarcoris guttiger</i>	○	
		Eysarcoris属の一種	<i>Eysarcoris</i> sp.	○	
		イネクロカメシ	<i>Scotinophara lurida</i>		○
		マルカメシ科	<i>Megacopta punctatissima</i>	○	○
	ミスギワカメシ科	ウスイロミスギワカメシ	<i>Saldula pallipes</i>		○
	マルミスムシ科	カメシ目	Hemiptera	○	
アミカゲロウ目(脈翅目)	クササゲロウ科	ヨツボシクササゲロウ	<i>Chrysopa septempunctata</i>		
		ニッポシクササゲロウ	<i>Chrysoperla carnea</i>	○	
シリアゲムシ目(長翅目)	シリアゲムシ科	ヤマトシリアゲ	<i>Panorpa japonica</i>	○	
トビケラ目(毛翅目)	シマトビケラ科	オオシマトビケラ	<i>Macrostemum radiatum</i>		○
チョウ目(鱗翅目)	ミノガ科	オオミノガ	<i>Eumeta japonica</i>	○	
	スガ科	コナガ	<i>Plutella xylostella</i>	○	
	イラガ科	イラガ	<i>Monema flavescens</i>	○	
	イラガ科	アオイイラガ	<i>Parasa consocia</i>	○	

表-2-6(3) 陸上昆虫類確認種一覧表(3)

目 名	科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
チョウ目(鱗翅目)	セセリチョウ科	チャバネセセリ	<i>Pelopidas mathias oberthueri</i>		○
		オオチャバネセセリ	<i>Polytremis pellucida</i>	○	
		キマダラセセリ	<i>Potanthus flavus</i>	○	
	テングチョウ科	テングチョウ	<i>Libythea celtis</i>		○
	ジシメチョウ科	ルリジシメ	<i>Celastrina argiolus ladonides</i>	○	
		ウラギンジシメ	<i>Curetis acuta paracuta</i>		○
		ツバメジシメ	<i>Everes argiades hellotia</i>	○	
		ヘニジシメ	<i>Lycaena phlaeas daimio</i>	○	○
		ムラサキシシメ	<i>Narathura japonica</i>	○	
		ヤマトジシメ	<i>Pseudozizeeria maha argia</i>		○
		コムラサキ	<i>Apatura metis</i>	○	
	タテハチョウ科	ツマグロヒヨウモン	<i>Argyreus hyperbius hyperbius</i>		○
		ヒメアカタテハ	<i>Cynthia cardui</i>	○	○
		ゴマダラチョウ	<i>Hestina japonica</i>		○
		ルリタテハ本土亜種	<i>Kaniska canace nojaponicum</i>		○
		コミスジ	<i>Neptis sappho</i>	○	
		キタテハ	<i>Polygonia c-aureum c-aureum</i>	○	○
		アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon nipponum</i>	○	○
	アゲハチョウ科	クロアゲハ	<i>Papilio protenor</i>		○
		ナミアゲハ	<i>Papilio xuthus</i>	○	○
	シロチョウ科	モンキチョウ	<i>Colias erate poliographus</i>		○
		キチョウ	<i>Eurema hecabe</i>	○	○
		モンシロチョウ	<i>Pieris rapae crucivora</i>	○	○
	ジャノメチョウ科	クロノマチョウ	<i>Melanitis phedima oitensis</i>		○
		ヒメウラナミジャノメ	<i>Ypthima argus</i>	○	○
	メイガ科	ワタヘリクロノメイガ	<i>Diaphania indica</i>	○	
	シャクガ科	フタミトビヒメシャク	<i>Pylargosceles steganioides</i>	○	
	カレハガ科	タケカレハ	<i>Euthrix albomaculata</i>	○	
		オビカレハ	<i>Malacosoma neustria</i>	○	
	ヒトリガ科	カノコガ	<i>Amata fortunei</i>	○	
		ヒトリガ	<i>Arctia caja</i>	○	
		アメリカシロヒトリ	<i>Hyphantria cunea</i>	○	
	ドクガ科	マメドクガ	<i>Cifuna locuples</i>	○	
		ドクガ科	<i>Lymantriidae</i>	○	
	ヤカ科	ナンキンノカワガ	<i>Gadirtha uniformis</i>	○	
		ヨトウガ	<i>Mamestra brassicae</i>	○	
		ヤカ科	<i>Noctuidae</i>	○	
ハエ目(双翅目)	ユスリカ科	ユスリカ科	<i>Chironomidae</i>	○	○
	ケバエ科	メスアカケバエ	<i>Bibio rufiventris</i>	○	
	クロハネキノコバエ科	クロハネキノコバエ科	<i>Sciaridae</i>		○
	ミスアブ科	エゾホソルミスアブ	<i>Actina jezoensis</i>	○	
	ムシヒキアブ科	アオメアブ	<i>Cophinopoda chinensis</i>	○	○
	アシナガハエ科	アシナガハエ科	<i>Dolichopodidae</i>		○
	ノミバエ科	ノミバエ科	<i>Phoridae</i>		○
	ハモグリバエ科	ハモグリバエ科	<i>Agromyzidae</i>		○
	ショウショウハエ科	ショウショウハエ科	<i>Drosophilidae</i>		○
	クロハエ科	クロハエ科	<i>Calliphoridae</i>		○
	イエバエ科	イエバエ科	<i>Muscidae</i>		○
コウチュウ目(鞘翅目)	ホソクビゴミシ科	コホソクビゴミシ	<i>Brachinus stenoderus</i>		○
		ミイテラゴミシ	<i>Pheropsophus jessoensis</i>		○
	オサムシ科	Amara属の一種	<i>Amara</i> sp.		○
		ホシホシゴミシ	<i>Anisodactylus punctatipennis</i>		○
		ドウイロミスギワゴミシ	<i>Bembidion stenoderum</i>		○
		ヤコンオサムシ	<i>Carabus yaconinus</i>		○
		アカガネアオゴミシ	<i>Chlaenius abstersus</i>		○
		アトホシアオゴミシ	<i>Chlaenius naeviger</i>		○
		アオゴミシ	<i>Chlaenius pallipes</i>		○
		セアカヒラタゴミシ	<i>Dolichus halensis</i>		○
		アオヘリホソゴミシ	<i>Drypta japonica</i>		○
		クビホソゴミシ	<i>Galerita orientalis</i>		○
		スシアオゴミシ	<i>Haplochlaenius costiger</i>		○

表-2-6(4) 陸上昆虫類確認種一覧表(4)

目 名	科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
コウチュウ目(鞘翅目)	オサムシ科	ヒメコ`モクムシ	<i>Harpalus jureceki</i>		○
		ヒラタコ`モクムシ	<i>Harpalus platynotus</i>		○
		オオコ`ミムシ	<i>Lesticus magnus</i>		○
		カワチマルクビコ`ミムシ	<i>Nebria lewisi</i>		○
		ヒラタアトキリコ`ミムシ	<i>Parena cavipennis</i>		○
		キアシヌレチコ`ミムシ	<i>Patrobus flavipes</i>		○
		オオナガコ`ミムシ	<i>Pterostichus fortis</i>		○
		キンナガコ`ミムシ	<i>Pterostichus planicollis</i>		○
		オオクロナガコ`ミムシ	<i>Pterostichus prolongatus</i>		○
		ナカ`ヒョウタンコ`ミムシ	<i>Scarites terricola</i>		○
		オオクロツヤヒラタコ`ミムシ	<i>Synuchus nitidus</i>		○
		ヨツモンコミス`キ`ワコ`ミムシ	<i>Tachyura laetifica</i>		○
		Tachyura属の一種	<i>Tachyura</i> sp.		○
	ハンミョウ科	エリザ`ハンミョウ	<i>Cicindela elisae</i>		○
		コハンミョウ	<i>Cicindela specularis</i>		○
	ガムシ科	ガムシ科	Hydrophilidae		○
	エンマムシ科	Margarinotus属の一種	<i>Margarinotus</i> sp.		○
	タマキノコムシ科	タマキノコムシ科	Leiodidae		○
	シテムシ科	オオサカヒラタシテムシ	<i>Eusilpha jakowlewi similator</i>		○
		オオヒラタシテムシ	<i>Eusilpha japonica</i>		○
	ハネカクシ科	Anotylus属の一種	<i>Anotylus</i> sp.		○
		アオハ`アリガ`タハネカクシ	<i>Paederus fuscipes</i>		○
		Philonthus属の一種	<i>Philonthus</i> sp.		○
		Sepedophilus属の一種	<i>Sepedophilus</i> sp.		○
		Stenus属の一種	<i>Stenus</i> sp.		○
		ハネカクシ科	Staphylinidae		○
	クワカ`タムシ科	コクワカ`タ	<i>Dorcus rectus</i>	○	
	コガ`ネムシ科	コイチャコガ`ネ	<i>Adoretus tenuimaculatus</i>		○
		アオト`ウガ`ネ	<i>Anomala albopilosa</i>	○	
		ドウガ`ネ`ブイ`ブイ	<i>Anomala cuprea</i>		○
		ヒラタアオコガ`ネ	<i>Anomala octiescostata</i>		○
		ハン`ヒメコガ`ネ	<i>Anomala puncticollis</i>		○
		ヒメコガ`ネ	<i>Anomala rufocuprea</i>	○	○
		クロコガ`ネ	<i>Holotrichia kiotoensis</i>		○
		ヒメ`ロウト`コガ`ネ	<i>Maladera orientalis</i>		○
		コガ`ネムシ	<i>Mimela splendens</i>	○	
		Nipponoserica属の一種	<i>Nipponoserica</i> sp.		○
		コブ`マルエンマコガ`ネ	<i>Onthophagus atripennis atripennis</i>		○
		コアオハナムグ`リ	<i>Oxyctonia jucunda</i>	○	○
		マメコガ`ネ	<i>Popillia japonica</i>	○	○
		シロテンハナムグ`リ	<i>Protaetia orientalis</i>		○
		カナ`ブン	<i>Rhomborrhina japonica</i>	○	
		コケシマク`ソコガ`ネ	<i>Rhyssalus samurai</i>		○
		ホソケシマク`ソコガ`ネ	<i>Trichiorhyssalus asperulus</i>		○
	タムシ科	ヤマトタムシ	<i>Chrysochroa fulgidissima</i>		○
		ハイロヒラタチビ`タムシ	<i>Habroloma griseonigrum</i>	○	
	コメツキムシ科	サビ`キコリ	<i>Agrypnus binodulus</i>	○	○
		コガ`タヒメサビ`キコリ	<i>Agrypnus hypnicola</i>		○
		ヒメサビ`キコリ	<i>Agrypnus scrofa</i>		○
		Migiwa属の一種	<i>Migiwa</i> sp.		○
		シ`ョウカイ`ホ`ン科	Podabrus属の一種		○
	ホタル科	オハ`ホ`タル	<i>Lucidina biplagiata</i>		○
	シ`ョウカイモト`キ科	ツマキアオシ`ョウカイモト`キ	<i>Malachius prolongatus</i>		○
	テントウムシ科	カメノコテントウ	<i>Aiolocaria hexaspilota</i>		○
		ム`ア`シロホシテントウ	<i>Calvia muiri</i>		○
		ナナホシテントウ	<i>Coccinella septempunctata</i>	○	○
		マクガ`タテントウ	<i>Coccinula crotchii</i>	○	○
		ナミテントウ	<i>Harmonia axyridis</i>		○
		キイロテントウ	<i>Illeis koebelei</i>	○	
		ヒメカメノコテントウ	<i>Propylea japonica</i>	○	
	テントウムシダマシ科	ヨツボ`シテントウ`ダマシ	<i>Ancylopus pictus</i>	○	○

表-2-6(5) 陸上昆虫類確認種一覧表(5)

目 名	科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
コウチュウ目(鞘翅目)	ケシキスイ科	ケシキスイ科	Nitidulidae		○
	クチキムシ科	オオクチキムシ	<i>Allecula fuliginosa</i>		○
	アリモトキ科	Anthicus属の一種	<i>Anthicus</i> sp.		○
		ホソクビアリモトキ	<i>Formicomus braminus</i>		○
		Mecynotarsus属の一種	<i>Mecynotarsus</i> sp.		○
		ヨツボシホソアリモトキ	<i>Pseudoleptaleus valgipes</i>		○
	ハムシダマシ科	ハムシダマシ	<i>Lagria rufipennis</i>	○	
	ハナノミ科	クロハナミ	<i>Mordella brachyura brachyura</i>		○
	カミキリモトキ科	モモブトカミキリモトキ	<i>Oedemeronia lucidicollis</i>	○	
	コミムシダマシ科	ヤマトスナコミムシダマシ	<i>Gonocephalum coenosum</i>		○
		コスナコミムシダマシ	<i>Gonocephalum coriaceum</i>		○
		ホソスナコミムシダマシ	<i>Gonocephalum sexuale</i>	○	
	カミキリムシ科	ゴマダラカミキリ	<i>Anoplophora malasiaca</i>	○	
	ハムシ科	アカガネサルハムシ	<i>Acrothinium gaschkevitchii</i>		○
		Altica属の一種	<i>Altica</i> sp.		○
		ウリハムシモトキ	<i>Atrachya menetriesi</i>	○	
		ウリハムシ	<i>Aulacophora femoralis</i>		○
		クロウリハムシ	<i>Aulacophora nigripennis</i>	○	○
		アオハネサルハムシ	<i>Basilepta fulvipes</i>		○
		ヨモギハムシ	<i>Chrysolina aurichalcea</i>	○	○
		バラリツツハムシ	<i>Cryptocephalus approximatus</i>		○
		クロボシツツハムシ	<i>Cryptocephalus signaticeps</i>	○	○
		クワハムシ	<i>Fleutiauxia armata</i>	○	
		コガタルハムシ	<i>Gastrophysa atrocyanea</i>	○	
		ヨモギトビハムシ	<i>Longitarsus succineus</i>		○
		Longitarsus属の一種	<i>Longitarsus</i> sp.		○
		フタクサハムシ	<i>Ophraella notulata</i>	○	
		ヒメキハネサルハムシ	<i>Pagria signata</i>	○	
		ヤナキリハムシ	<i>Plagiodera versicolora</i>	○	○
		ニレハムシ	<i>Pyrrhalta maculicollis</i>		○
		ドウガネサルハムシ	<i>Scelodonta lewisii</i>		○
		ハムシ科	Chrysomelidae		○
	ゾウムシ科	イチゴハナゾウムシ	<i>Anthonomus bisignifer</i>	○	
		オシロアシナガゾウムシ	<i>Mesalcidodes trifidus</i>	○	○
		Scepticus属の一種	<i>Scepticus</i> sp.		○
		Sitona属の一種	<i>Sitona</i> sp.		○
		ゾウムシ科	Curculionidae	○	
	オサゾウムシ科	シハオサゾウムシ	<i>Sphenophorus venatus vestitus</i>		○
ハチ目(膜翅目)	ミツシハハチ科	アカシチュウレンジ	<i>Arge nigrinodosa</i>	○	○
		チュウレンジハチ	<i>Arge pagana</i>	○	
		ルリチュウレンジ	<i>Arge similis</i>		○
	ハハチ科	ハグロハハチ	<i>Allantus luctifer</i>	○	○
		ハハチ科	Tenthredinidae		○
	コマユハチ科	コマユハチ科	Braconidae		○
	ヒメハチ科	ヒメハチ科	Ichneumonidae		○
	カマハチ科	トビイロカマハチ	<i>Haplogonatopus apicalis</i>		○
	アリ科	キイロシリアゲアリ	<i>Crematogaster osakensis</i>		○
		ルリアリ	<i>Iridomyrmex itoi</i>		○
		トビイロケアリ	<i>Lasius niger</i>	○	○
		ヒメアリ	<i>Monomorium intrudens</i>	○	○
		アメイロアリ	<i>Paratrechina flavipes</i>		○
		アミメアリ	<i>Pristomyrmex pungens</i>		○
		ウロコアリ	<i>Strumigenys lewisi</i>		○
		トビイロシワアリ	<i>Tetramorium caespitum</i>		○
		フタモンアシナガハチ	<i>Polistes chinensis</i>	○	○
		セグロアシナガハチ	<i>Polistes jadwigae</i>		○
	スズメハチ科	モンズズメハチ	<i>Vespa crabro</i>		○
		オオスズメハチ	<i>Vespa mandarinia</i>		○
		キイロスズメハチ	<i>Vespa simillima</i>		○
		アリハチ科	フタホシアリハチ		○
	ツチハチ科	ハラナガツチハチ	<i>Campsomeris schulthessi</i>	○	

表-2-6(6) 陸上昆虫類確認種一覧表(6)

目 名	科 名	種 名	学 名	市民調査	専門調査
ハチ目(膜翅目)	コシブトハナバチ科	クマバチ	<i>Xylocopa appendiculata</i>	○	○
	ミツバチ科	ニホンミツバチ	<i>Apis cerana</i>	○	○
		セイヨウミツバチ	<i>Apis mellifera</i>		○
	コハナバチ科	アカガネコハナバチ	<i>Halictus aerarius</i>		○
		コハナバチ科	Halictidae		○
	ハキリバチ科	Megachile属の一種	<i>Megachile</i> sp.		○
種類数	123	316	316	154	217

※種名の表記について

- 種名の欄に「……属の一種」とあるのは、採集した標本の発達が不十分等により種レベルまでの特定はできなかったが、属レベルまでの特定はでき、その属に含まれる1種であることを示す表記。
- 種名の欄に「……科(もしくは目)」とあるのは、科(目)レベルまで種の特定ができる標本を複数採集したものの、その中に複数種含まれるのか、1種のみであるのかも特定できないことを示す表記。

4. 水生昆虫類

水生昆虫は表-2-7に示す6目15科30種が確認された。出現種の多くはトンボ類のヤゴや水生カメムシ類、ハエ目の幼虫などであった。

これらの水生昆虫は流れのゆるい場所や止水に主に生息している。

調査場所である樋之上ワンドは淀川の左岸に作られたワンドで、流れはほとんど無く、水深は浅く底質は泥であった。大谷川は流れが緩やかで、水生植物が多くみられた。

樋之上ワンドではアオモンイトトンボ、オオヤマトンボ、シオカラトンボ、ハイイロチビミズムシ、チビミズムシ、ヤマトゴマフガムシなどの生息が確認された。

また、ワンドの入り口部分は淀川の影響により砂礫底となっており、ここではオナガサナエ、オオオシマトビケラなど、通常河川の瀬に生息する種が確認された。

大谷川ではアオモンイトトンボ、ハグロトンボ、ギンヤンマ、シオカラトンボなどトンボ類が多く、淵や止水にみられる種が主体であった。

希少な種としてはホンサナエ(大阪府レッドデータブックの準絶滅危惧種)が確認された。本種は樋之上ワンドの入り口付近の砂底で確認した。

表-2-7 水生昆虫類確認種一覧表

目 名	科 名	種 名	調査区分別		場所別	
			市民調査	専門調査	樋之上ワンド	大谷川
カゲロウ目(蜉蝣目)	マダラカゲロウ科	アカマダラカゲロウ		○	○	
トンボ目(蜻蛉目)	イトトンボ科	クロイトトンボ	○			○
		クロイトトンボ属		○	○	
		アオモンイトトンボ	○		○	○
	カワトンボ科	ハグロトンボ	○			○
		カワトンボ	○		○	
	ヤンマ科	ギンヤンマ	○			○
	サナエトンボ科	ホンサナエ		○	○	
		オナガサナエ		○	○	
		コオニヤンマ		○	○	
		タベサナエ	○		○	
	エゾトンボ科	オオヤマトンボ	○		○	
		コヤマトンボ		○	○	
	トンボ科	シオカラトンボ	○	○	○	○
		ウスバキトンボ	○	○	○	
		コシアキトンボ		○	○	
カメシ目(半翅目)	アメンボ科	アメンボ	○	○	○	○
		ヒメアメンボ	○	○	○	○
	ミスギワカメシ科	ミスギワカメシ		○	○	
	ミスムシ科	ハイイロチビミスムシ		○	○	
		チビミスムシ	○		○	
		チビミスムシ属		○	○	
トビケラ目(毛翅目)	シマトビケラ科	コガタシマトビケラ属		○	○	
		オオシマトビケラ		○	○	
ハエ目(双翅目)	ガガンボ科	ガガンボ科	○			○
	ユスリカ科	セスジユスリカ	○			○
		エリユスリカ亜科		○	○	
	ミスアブ科	ミスアブ科		○	○	
コウチュウ目(鞘翅目)	ガムシ科	ヤマトゴマフガムシ		○	○	
合 計	15	30	15	19	25	9

5. 鳥類

鳥類は表-2-8に示す12目31科74種が確認された。出現種の大部分はまとまった樹林や草地を有する淀川河川敷の環境を反映して樹林地や林縁、草地などの山野の鳥であった。

夏期にはオオヨシキリが観察され、河川敷のヨシ原は重要な繁殖場所になっていると考えられた。

冬季にはマガモ、コガモ、オカヨシガモなどの水鳥が多くみられた。カモ類は休息場所として淀川の水辺を利用していた。この他冬鳥ではノスリ、チュウヒなどの猛禽類やアリスイ、ビンズイ、ジョウビタキ、シロハラ、ツグミなどの小鳥類も確認された。

留鳥ではスズメ、ヒヨドリ、ウグイス、ホオジロ、カワラヒワ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラスなどが確認された。留鳥の多くは淀川河川敷で繁殖していると考えられる。

図-2-1に季節別の生活型の出現種数を示した。出現種数は春季・夏季より秋季・冬季の方が多い傾向がみられた。これは秋季・冬季には留鳥に加えて冬鳥が飛来し、しかもこれらは夏鳥に比べて種数が多いため種数の増加となっている。

淀川河川敷の樹林や草地、水辺等の環境の規模・まとまりからみて冬季は渡り鳥の移動ルートや冬鳥の越冬地、夏鳥や留鳥の繁殖地として重要な役割を果たしていると考えられる。

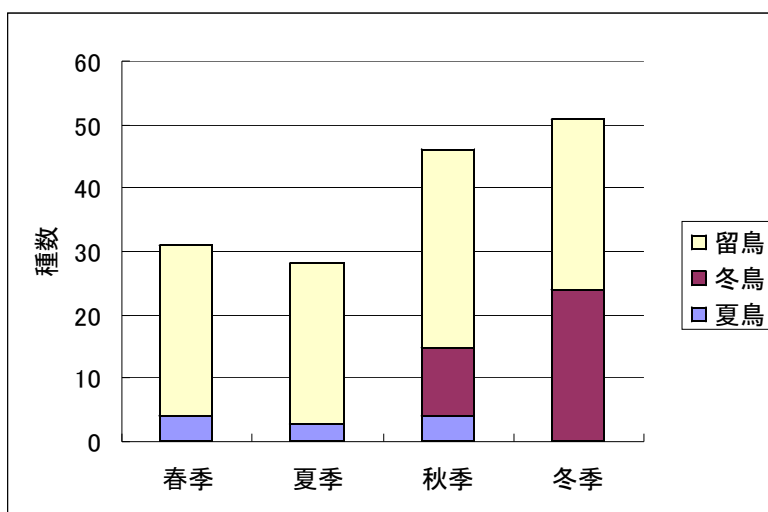


図-2-1 季節別の生活型種数

表-2-8(1) 鳥類確認種一覧表(1)

目名	科名	種名	渡り区分	調査区分別		季別			
				市民調査	専門調査	春季	夏季	秋季	冬季
カイツブリ目	カイツブリ科	カンムリカイツブリ	冬鳥	○	○				○
ペリカン目	ウ科	カワウ	留鳥	○	○	○	○	○	○
コウノトリ目	サギ科	ダイサギ	留鳥	○	○	○	○	○	○
		チュウサギ	夏鳥	○			○		
		コサギ	留鳥	○	○	○	○	○	○
		アオサギ	留鳥	○	○	○	○	○	○
		マカモ	冬鳥	○	○			○	○
カモ目	カモ科	アヒル	籠脱け		○	○	○	○	
		カルカモ	留鳥	○	○	○	○	○	
		コガモ	冬鳥	○	○			○	○
		オカヨシガモ	冬鳥	○	○				○
		ヒトリガモ	冬鳥	○	○			○	○
		アメリカヒトリ	冬鳥		○			○	○
		オナカガモ	冬鳥		○				○
		ホシハジロ	冬鳥		○				○
		ビロートキンクロ	冬鳥	○					○
		カワアイサ	冬鳥		○				○
		効目	効科	ミサゴ	留鳥		○		○
トビ	留鳥			○	○		○	○	○
ノスリ	冬鳥				○				○
チュウヒ	冬鳥				○				○
ハヤブサ科	ハヤブサ		留鳥	○	○	○		○	○
キジ目	キジ科	ゴジュケイ	留鳥	○	○	○	○	○	○
		キジ	留鳥	○	○				
ツル目	クイナ科	バン	留鳥		○			○	
チドリ目	チドリ科	コチドリ	夏鳥		○	○			
		ケリ	留鳥		○	○			
	シギ科	イソシギ	留鳥	○	○	○		○	○
		チュウシャクシギ	旅鳥		○	○			
		ヤマシギ	冬鳥		○			○	
	カモメ科	ユリカモメ	冬鳥	○	○				○
コアジサシ		夏鳥		○	○	○			
ハト目	ハト科	ドバト	籠脱け		○	○	○		○
		キジハト	留鳥	○	○	○	○	○	○
ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	留鳥	○	○	○	○	○	○
キツツキ目	キツツキ科	アリスイ	冬鳥		○				○
スズメ目	ヒバリ科	ヒバリ	留鳥	○		○	○	○	○
		ツバメ	夏鳥	○	○	○	○	○	
	コシアカツバメ	夏鳥	○				○		
		セキレイ科	キセキレイ	留鳥	○			○	
	ハクセキレイ		留鳥	○	○		○	○	○
	セグロセキレイ		留鳥	○	○	○	○	○	○
	ピンズイ		冬鳥	○					○
	ヒヨドリ科		ヒヨドリ	留鳥	○	○	○	○	○
	モズ科	モズ	留鳥	○	○	○	○	○	○
	レンジャク科	ヒレンジャク	旅鳥		○				○
	ツグミ科	ジョウビタキ	冬鳥		○			○	○
		ヒタキ	旅鳥		○			○	
		アカハラ	冬鳥		○				○
		シロハラ	冬鳥		○			○	○
		ツグミ	冬鳥	○	○			○	○
		ウグイス科	ウグイス	留鳥	○	○	○	○	○
		オオヨシキリ	夏鳥	○	○	○			

表-2-8(2) 鳥類確認種一覧表(2)

目名	科名	種名	渡り区分	調査区分別		季別			
				市民調査	専門調査	春季	夏季	秋季	冬季
スズメ目	ウグイス科	ホソソムシイ	夏鳥	○				○	
		セッカ	留鳥	○	○	○	○		
	ヒタキ科	キヒタキ	夏鳥	○				○	
	エナガ科	エナガ	留鳥		○	○	○	○	○
	シジュウカラ科	ヤマカラ	留鳥		○			○	○
		シジュウカラ	留鳥	○	○	○		○	○
	メジロ科	メジロ	留鳥	○	○	○		○	○
	ホオジロ科	ホオジロ	留鳥	○	○	○	○	○	○
		カシラダカ	冬鳥		○				○
		アオジ	冬鳥	○	○			○	○
	アトリ科	アトリ	冬鳥		○			○	
		カララヒワ	留鳥	○	○	○	○	○	○
		オオマシコ	冬鳥		○				○
		ベニマシコ	冬鳥	○	○				○
		シメ	冬鳥		○			○	○
	ハタオリ科	スズメ	留鳥	○	○	○	○	○	○
	ムクドリ科	ムクドリ	留鳥	○	○	○	○	○	○
	カラス科	カケス	留鳥	○				○	
		ハシボソガラス	留鳥	○	○	○	○	○	○
		ハシブトガラス	留鳥	○	○	○	○	○	○
合計	32	74		46	66	34	30	48	53

渡り区分

夏鳥：春に日本より南の地域から渡ってきて日本で繁殖し、秋には南の地域へ渡って冬を過ごす鳥。

冬鳥：春から夏に日本より北の地域で繁殖し、秋に日本へ渡ってきて越冬し、春には北の地域へ戻る鳥。

留鳥：同じ地域に一年中生息する鳥。

旅鳥：日本より北で繁殖し、日本より南で越冬し、日本には春の北上と秋の南下の際に立ち寄る鳥。

籠脱け：動物園や個人の家などで飼育されていた鳥が、何らかの理由で逃げ出し、野外で観察されること。また、その鳥。

6. 両生類・爬虫類

両生類ではアマガエル、ヌマガエル、ツチガエル、トノサマガエル、ウシガエルの5種が確認された。

カエル類ではウシガエル以外は個体数が非常に少なかった。水田や水溜り、ため池など、カエル類の繁殖場所となる止水環境が淀川河川敷には少ないことが要因と考えられる。ウシガエルは樋之上ワンドで成体と幼生を目撃しており、樋之上ワンドで繁殖しているものと思われる。

爬虫類ではクサガメ、ミシシippアカミミガメ、イシガメ、カナヘビ、シマヘビの5種が確認された。

最も多く観察されたのは帰化種のミシシippアカミミガメで、樋之上ワンドや穂谷川の河口などの淀みで確認した。ヘビ類はシマヘビの1種のみで確認で種数は少なかった。これは餌となるカエル類が少ないことによると考えられる。

希少種としてはイシガメが環境省レッドリストの情報不足（DD）と大阪府レッドデータブックの要注目種に該当する。

表-2-9 両生類・爬虫類確認種一覧表

目	科	種名	市民調査	専門調査
カエル目	アマガエル科	アマガエル		○
	アカガエル科	トノサマガエル	○	○
		ヌマガエル	○	○
		ウシガエル	○	○
		ツチガエル	○	
カメ目	イシガメ科	クサガメ		○
		ミシシippアカミミガメ	○	○
		イシガメ	○	
トカゲ目	カナヘビ科	カナヘビ	○	○
	ヘビ科	シマヘビ		○
合計	5	10	7	8

7. 哺乳類

哺乳類は表-2-10に示す4目8科13種が確認された。

モグラ目ではモグラ属が確認された。モグラ属は土のやわらかい土手沿いや河畔林内に巣穴や坑道がみられた。

コウモリ目ではヒナコウモリ科が確認された。ヒナコウモリ科は夏季の夜間調査において、目視やバットディテクター*により全域で確認された。

ネズミ目ではネズミ科、ハツカネズミ、ハタネズミ、カヤネズミを確認した。カヤネズミは河川敷のヨシ原やススキ草地で球巣を確認している。

ネコ目では、アライグマ、タヌキ、キツネ、ノイヌ、イタチ属、ノネコの6種を確認した。タヌキは河畔林周辺で足跡を観察したほかに、無人撮影装置による撮影にも成功した。

キツネは楠葉周辺で足跡や糞が確認され、夏季の夜間調査では成獣を目撃している。

アライグマおよびイタチ属の一種はワンド周辺や流入する河川の湿地部で足跡が確認された。

淀川の樹林や草地等の緑地のまとまりからみてこれらの種は淀川河川敷内で繁殖が可能であると考えられる。

希少種としてはキツネとカヤネズミの2種を確認できた。キツネは大阪府レッドデータブックにおいて、準絶滅危惧種に選定されている。カヤネズミは大阪府レッドデータブックにおいて、要注目種に選定されている。

表-2-10 哺乳類確認種一覧表

目名	科名	種名	市民調査	専門調査
モグラ目(食虫目)	モグラ科	モグラ属	○	○
コウモリ目(翼手目)	ヒナコウモリ科	ヒナコウモリ科		○
ネズミ目(齧歯目)	ネズミ科	ハタネズミ	○	
		カヤネズミ	○	○
		ハツカネズミ	○	
		ネズミ科	○	
	ヌートリア科	ヌートリア	○	
ネコ目(食肉目)	アライグマ科	アライグマ		○
	イヌ科	タヌキ		○
		キツネ		○
		ノイヌ	○	
	イタチ科	イタチ属	○	○
	ネコ科	ノネコ	○	
合計	8	13	9	7

*バットディテクター：コウモリの出す超音波を人間の耳でも聞こえるようにする検知器。

8. 希少種

希少種として表-2-11に示す文献に記載のある種を抽出し、整理した。

その結果、表-2-12に示すように、植物で10科13種、動物で5綱14目19科30種を希少種として整理することができた。

植物では大阪府レッドデータブックで絶滅種とされているアズマツメクサとアサザが確認されたことが特筆すべき点と考えられる。

動物では鳥類のチュウヒ、ハヤブサといった希少性の高いランクの猛禽類が確認されているが、これらは生息環境の一部として淀川上空を飛翔していたものであり、淀川に依存した種ではない。

表-2-11 希少種の抽出に用いた文献

文 献 名	対象分類群	
	動物	植物
1. 環境省レッドリスト(2006～2007年) 全分類群	○	○
2. 改訂・近畿地方の保護上重要な植物 ーレッドデータブック近畿2001ー, 2001年		○
3. 大阪府における保護上重要な野生生物 ー大阪府レッドデータブックー, 2000年	○	○

表-2-12 希少種一覧表(植物)

科 名	種 名	該当ランク		
		環境省RL	近畿RDB	大阪府RDB
イラクサ科	ホソバイラクサ		絶滅危惧C	絶滅危惧II類
タデ科	ホソバイヌタデ	準絶滅危惧	絶滅危惧A	絶滅危惧II類
	サデクサ		絶滅危惧C	準絶滅危惧
モクレン科	コブシ		絶滅危惧C	情報不足
ベンケイソウ科	オノマンネングサ			情報不足
	アズマツメクサ	準絶滅危惧	絶滅危惧A	絶滅
ユキノシタ科	タコノアシ	準絶滅危惧	絶滅危惧C	準絶滅危惧
ミツガシワ科	アサザ	準絶滅危惧	絶滅危惧A	絶滅
シソ科	ミゾコウジュ	準絶滅危惧	絶滅危惧C	要注目
ゴマノハグサ科	カワヂシャ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	要注目
イネ科	コゴメカゼクサ		絶滅危惧A	絶滅危惧I類
カヤツリグサ科	ヤガミスゲ		絶滅危惧C	準絶滅危惧
	ミコシガヤ		絶滅危惧C	準絶滅危惧
10科13種		6	12	13

表-2-12 希少種一覧表(動物)

分 類	目 名	科 名	種 名	該当ランク	
				環境省RL	大阪府RDB
硬骨魚綱	コイ目	コイ科	カネヒラ		要注目
			ワタカ		要注目
			ハス		要注目
			タモロコ		要注目
			ゼゼラ		要注目
			カマツカ		要注目
			コウライモロコ		要注目
昆虫綱	コウチュウ目	シデムシ科	オオサカヒラタシデムシ		準絶滅危惧
	トンボ目	サナエトンボ科	ホンサナエ		準絶滅危惧
鳥綱	カイツブリ目	カイツブリ科	カンムリカイツブリ		要注目
	ペリカン目	ウ科	カワウ		要注目
	コウノトリ目	サギ科	チュウサギ	準絶滅危惧	要注目
	タカ目	タカ科	ミサゴ	準絶滅危惧	要注目
			ノスリ		要注目
			チュウヒ	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧Ⅱ類
		ハヤブサ科	ハヤブサ	絶滅危惧Ⅱ類	要注目
	チドリ目	チドリ科	コチドリ		絶滅危惧Ⅱ類
			ケリ		要注目
		シギ科	イソシギ		準絶滅危惧
			チュウシャクシギ		準絶滅危惧
		カモメ科	コアジサシ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類
	ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ		準絶滅危惧
	キツツキ目	キツツキ科	アリスイ		準絶滅危惧
	スズメ目	ウグイス科	オオヨシキリ		準絶滅危惧
			セッカ		準絶滅危惧
		ヒタキ科	キビタキ		準絶滅危惧
		アトリ科	オオマシコ		準絶滅危惧
爬虫綱	カメ目	イシガメ科	イシガメ	情報不足	要注目
哺乳綱	ネズミ目	ネズミ科	カヤネズミ		要注目
	ネコ目	イヌ科	キツネ		準絶滅危惧
5綱	14目	19科	30種	6	30



アズマツメクサ



アサザ



カヤネズミの巣



キツネの巣



アリスイ



ミサゴ

代表的な希少種の写真

9. 枚方市における淀川自然环境の特徴

9-1. 淀川の概要

今回の生物調査の対象となった淀川は、淀川水系の中心的河川である。淀川水系は三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良の2府4県にまたがる流域面積8,240km²、幹線流路延長75.1kmに及ぶ日本を代表する水系である(図-2-2参照)。

その上流域は、日本最大の湖である琵琶湖を水源にもつ宇治川、三重、奈良などに水源を持つ木津川、京都など西に流域をもつ桂川に大別される。これら三川が京都盆地の西南部(八幡市付近)で合流して淀川となり、摂津、河内平野を貫流し、下流において神崎川、大川(旧淀川)に分派して大阪湾に注いでいる。また、兵庫に水源をもつ猪名川は神崎川の支川であり淀川の流域に含まれている。



図-2-2 淀川水系概要図
淀川河川事務所ホームページより引用

次に、淀川本川を縦断的にみてみると図-2-3に示すように大阪市淀川区付近にある淀川大堰や宇治川の天ヶ瀬ダム、さらに上流の瀬田川の洗堰といったダムや堰が存在し、降雨等による洪水時等における流量の調整に寄与していることが伺える。

特に枚方市付近についてみると、下流の淀川大堰と上流の天ヶ瀬ダムの間に位置し、これらの堰やダムの流量調節は安定した流れをつくり、洪水被害等の防止に繋がっている。

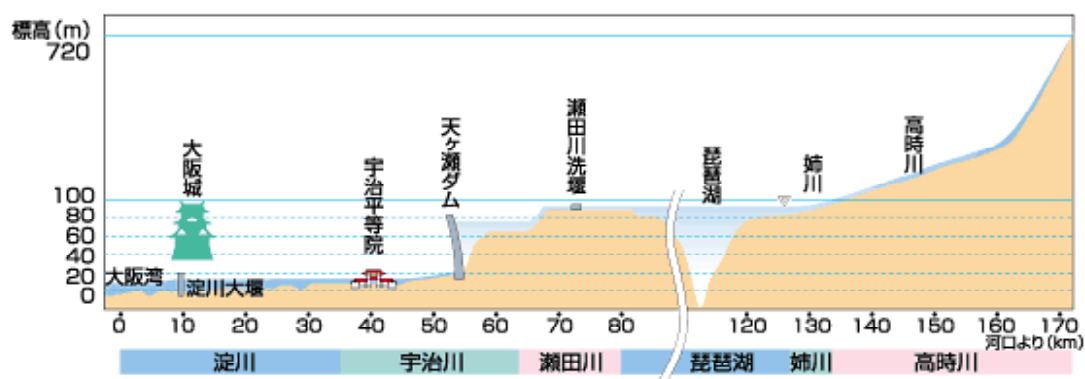


図-2-3 琵琶湖から淀川までの縦断図

淀川河川事務所ホームページより引用

9-2. 淀川の自然環境

淀川の自然環境の特徴としては次の事項が挙げられる。

■安定した河川環境

一般に河川は川の流れにより生じる土砂の侵食・運搬・堆積を繰り返しながらその形態が形成され、その土砂移動のサイクルが河川の自然環境を特徴づける重要な因子となっている。この点からみた場合には、河川の流れが安定することは河川本来の自然環境から例えば河川外の伐採跡地にみられるように草本から森林へと植生遷移が持続する安定した環境へと変化させてしまうという側面も持つ。

淀川の河川断面のうち河川公園等の位置する高水敷のほとんどは現状では安定した陸地化した環境となっており、河川本来の砂州等の環境は低水路内に限定される。

枚方市域の淀川もこの特徴を典型的に示す区域であり、安定した高水敷には河川公園やゴルフ場などの利用施設が多くみられる他、ヤナギ林や広葉樹林などの樹林もまとまってみられるなど安定した環境となっている。一方で低水敷の砂州(楠葉付近等)や楠葉ワンドのような流水の影響を受ける不安定な環境では、攪乱環境に適応した動植物が生息しているが、これらは流路近傍の限られた場所となっている。

ただ、枚方市域の淀川を総じてみた場合、限定的ではあるが流路近傍の砂州では河川特有の種がみられ、また、まとまった河畔林は鳥類等にとって良好な生息空間を提供しており、多様な環境が具備されているという点では枚方市域の生物多様性保全にとっては重要な環境であるといえる。

＜今回の調査で確認された砂州や水際等に特徴的な種＞

(植物) タコノアシ、ミゾコウジュ、ホソバユスタデ、サデクサ、ヤガミスゲ

(昆虫類) オオハサミムシ、カワチマルクビゴミムシ、コホソクビゴミムシ、コハンミョウ、ドウイロミズギワゴミムシ、ヨツモンコミズギワゴミムシ



河川本来の姿を留める砂州環境
(楠葉付近)

■ワンドの存在

ワンドとは淀川の本流沿いにある水のたまっているところで、本流とつながっているか、水が増えた時には連なってしまうようなところをいう。

その起源は明治時代初め頃に、舟運の航行のための水深確保と流速の低減を目的に設置された水制工に土砂が堆積して現状の形状になったものが起源とされており、その名残を留める代表的なものとして大阪市の城北地区のワンド群がある。

ワンドは水の流れがほとんどなく、止水域に生息する魚類等にとっては好適な環境であり、水辺の抽水植物の群落では魚類の産卵場所や稚魚の生息場所として重要な環境となっている。

城北ワンドでは天然記念物のイタセンパラが生息しており、淀川の環境を特徴づける代表的な種となっている。

枚方市には楠葉ワンドと樋之上ワンドがあり、今回の調査では樋之上ワンドを対象に魚類および水生昆虫の調査を行っている。

魚類ではフナ類やコウライニゴイの幼魚が多数確認できた他、カネヒラやカマツカといった希少種も確認できたが、水辺植生に乏しく産卵環境としては不十分と考えられ、幼魚等の一時的な生息環境として機能していると推察された。

図-2-4 淀川のワンド

	左 岸	右 岸
大阪市	城北ワンド群	平成ワンド
守口市	八雲ワンド 庭窪ワンド	
摂津市		鳥飼ワンド
寝屋川市	点野ワンド	
枚方市	楠葉ワンド 樋之上ワンド	



楠葉ワンド

■広大なヨシ原が存在する

ヨシは淀川を特徴づける植物の一つであり、大群落を形成して生物に生息空間を提供するとともに、淀川を代表する河川景観要素ともなっている。

淀川の代表的なヨシ原は図-2-5に示すとおりで、高水敷上に分布するものや干潮域の干潟に成立するものなど様々な様態のヨシ原がみられる。

枚方市域区間には同図に図示されたヨシ原は存在しないが、楠葉北部や船橋川河口付近等ではややまとまったヨシ原をみることができる。

ヨシ原には、ここを生息の場として利用する動植物がみられ、その代表的なものとしては、カヤネズミ(哺乳類)、オオヨシキリ、ツバメの集団営巣(以上鳥類)が知られている。

枚方市域においてもまとまったヨシ原は分布し、今回の調査においてもカヤネズミ(球巣)やオオヨシキリを確認している。しかし、今回の調査の中で以下のようなヨシ原の減少・衰退に係る事象がみられた。

- ・楠葉北部地区の橋本駅寄りのヨシ原が河川管理道整備により改変され面積が減少。
- ・つる植物のクズが繁茂し、ヨシ原を覆い、衰退傾向にある。(特に御殿山～天の川間)

今後は、ヨシ原に依存するこれらの種の動向も指標としてヨシ原の環境の変化を見ていく必要がある。

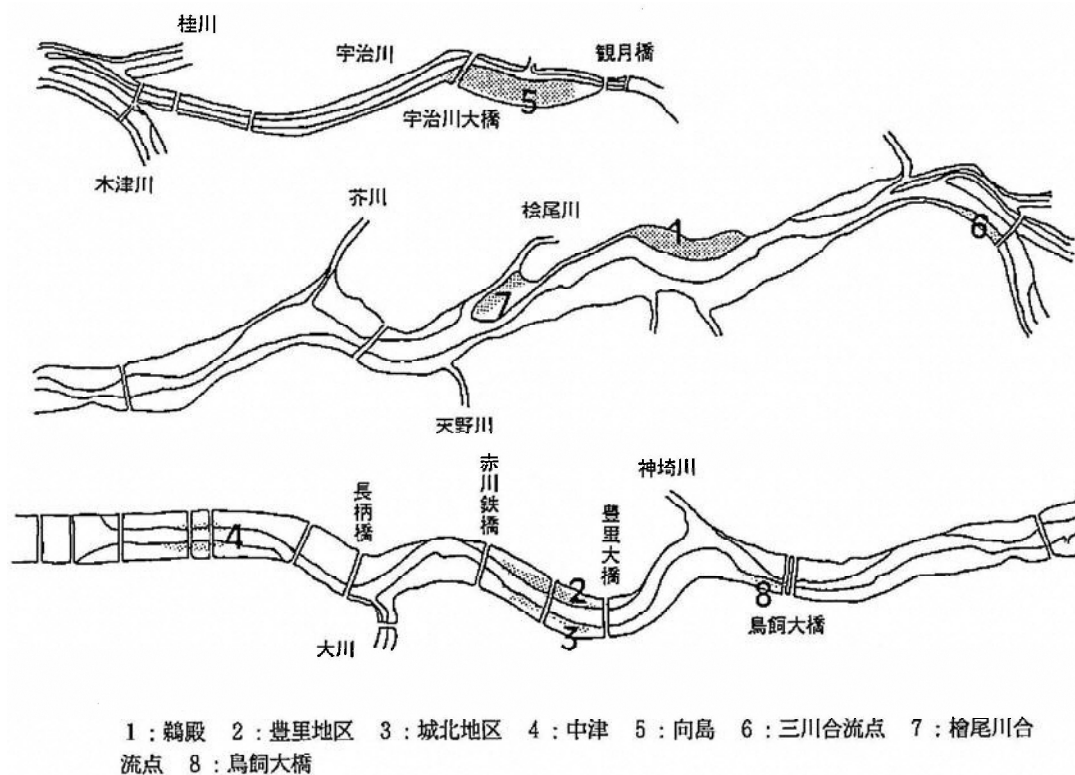


図-2-5 淀川の代表的なヨシ原

参考 植生分布面積による枚方市域区間の特徴

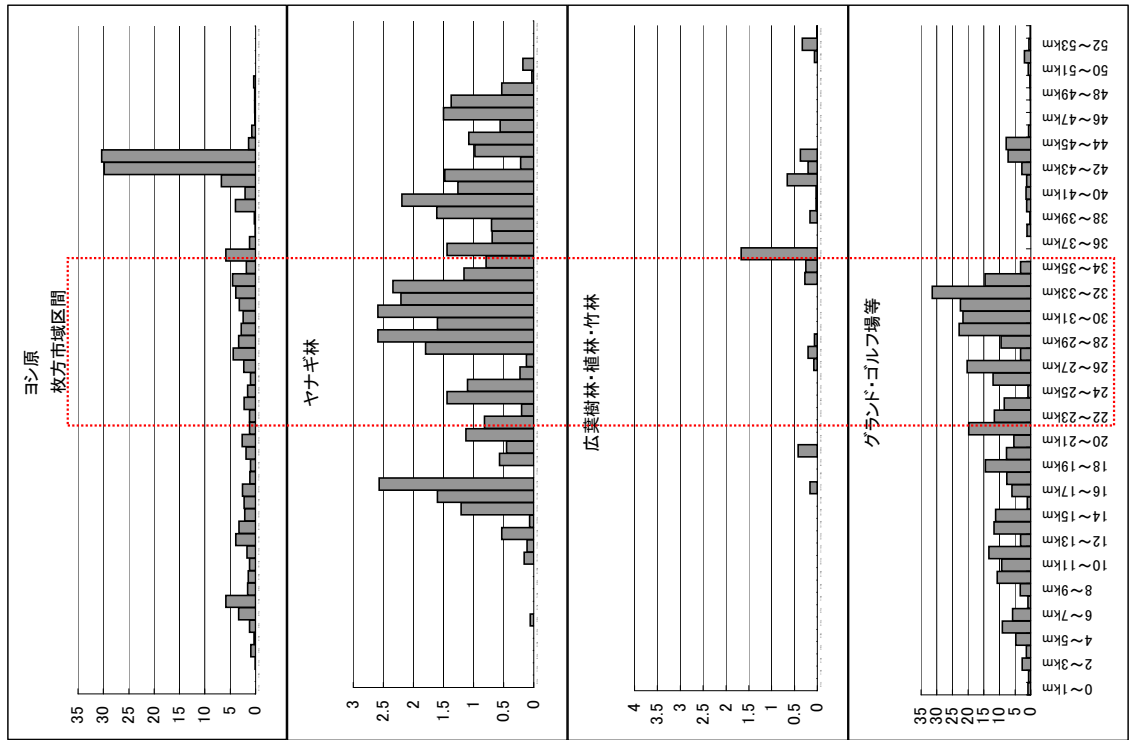
国土交通省の河川水辺の国勢調査(平成14年度)による淀川水系の植生図作成調査において整理された1km区間毎の植生分布面積から、現状の河川環境の特徴を指標する植生等の区分としてヨシ原、ヤナギ林、広葉樹林・竹林・植林、グラウンド・ゴルフ場を取り上げ分布面積について集計し、図-2-6に整理した。

その結果、淀川水系(河口～天ヶ瀬ダム間)における枚方市域区間の特徴は次のように整理することができる。

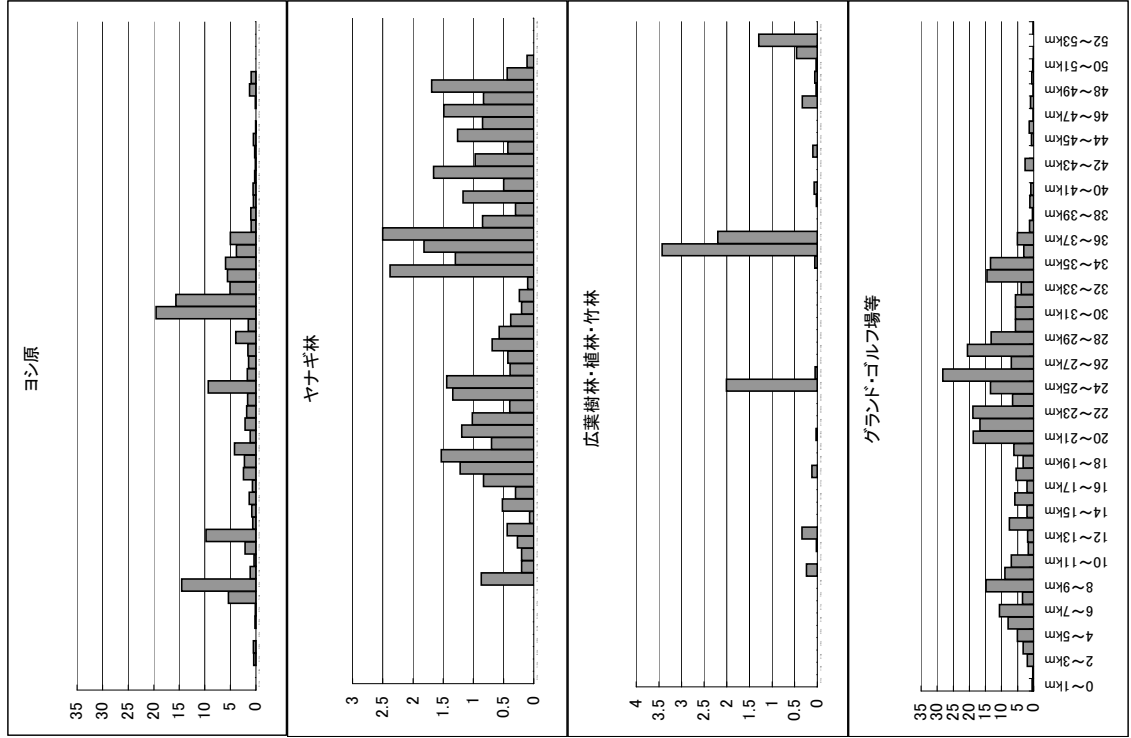
- ・ヨシ原は向島や鶴殿のように突出して広く分布はしていないが、1kmピッチで見ると途切れることなく分布している。グラウンドやゴルフ場等の土地利用面積が多い区間でも途切れることなく分布している。
- ・ヤナギ林は28km地点(磯島付近)より上流で多く分布し、枚方市域以外の区間に比べ、まとまって分布している区間が枚方市に集中している傾向が伺える。(1.5ha以上のヤナギ林の分布が6km区間連続するのは枚方市域のみである)
- ・広葉樹林等の樹林は本来河川区域には分布しないものであるが、先にみたように河川の安定化により分布が拡大していると推定される。枚方市域区間では御殿山～天野川間で高木化した広葉樹林がややまとまってみられる。
- ・グラウンド・ゴルフ場等の人の利用を目的とした土地利用の分布面積は、枚方市区間では牧野と楠葉の2箇所のゴルフ場があるために、他の区間に比べ面積の大きい区間となっている。

以上のように淀川の枚方市域区間は他の区間と比べ、人為的な土地利用とヤナギ林のような自然地域が並立してまとまって分布しているという特徴がよみとれる。実際の分布状況からみると、高水敷は土地利用が進んだものの、低水敷にはまとまった自然が分布しており、このような断面的なすみわけにより自然空間が分布しているという特徴がある。

左 岸



右 岸



面積 (ha)

図-2-6 1kmピッチの代表的な植生の分布面積 (河口～天ヶ瀬ダム間)

■外来種が多い

淀川は外来種の人為的な持ち込みや、侵入を受けやすい都市部を貫流する河川であり、外来の動物種にとってはまとまった規模の植生のある自然空間として、植物種にとっては競合相手の少ない開けた空間として侵入を受けやすい条件にある。

国土交通省が実施している河川水辺の国勢調査の結果から、植物の帰化率を近隣県の河川と比較してみると、図-2-7のとおりとなる。淀川は、突出して高い値ではないが、円山川、由良川、木津川といった都市化の進んでいない地域を流下する河川と比較すると高い値となっている。それぞれの河川の位置する土地利用等の違いが概ね帰化率に反映される形で現れているといえる。

枚方市域区間における今回の植物調査結果から外来種の割合である帰化率を算出すると合計種数440種のうち136種が外来種にあたり、帰化率は30.9%となった。この値は淀川全体の帰化率を上回っており、枚方区域は外来植物種の侵入を多く受けている区間といえる。

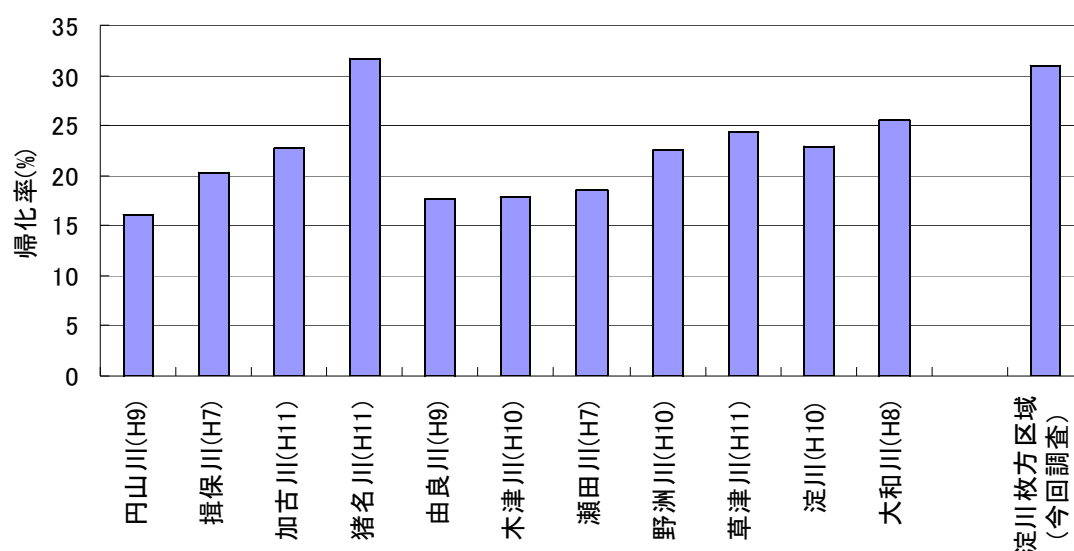


図-2-7 植物の帰化率の比較

出典：河川における外来種対策に向けて(案), リバーフロント整備センター, 2001年 をもとに作成

第3章 相観植生図からみた緑地の変化

1. 相観植生図の改訂

相観植生図の改訂にあたっては、最新の空中写真の判読により、植生の変化状況を確認するとともに、空中写真での判読が不確実な箇所や、主要な変化箇所については現地調査により現況の把握を行った。

植生図を図-3-1に示すと共に、植生単位およびその他の土地利用等の単位の概要は、表-3-1に整理した。

表-3-1 相観植生図の凡例概要

植生図凡例	概 要
コジイ林	人為干渉の少なかった社寺林などに残る、地域の自然植生。樹林高は15m以上と高く、大木が混じる。
アラカシ林	かつて農用林などの人為干渉を受けた二次林。コナラ林、アカマツ林が放置されて成立した林分がみられる。
ヤナギ林	淀川の河畔林を形成する。
コナラ林	かつて農用林などの人為干渉を受けた二次林。放置されてアラカシ林の構成種やモウソウチクの侵入がみられる。
アカマツ林	かつて用材林として維持管理されたが、放置されて、コナラ林、アラカシ林の構成種が多くなっている。
植林	国見山中腹にみられる林分は、戦後に植栽されたニセアカシア林が山火事で焼失した後に植えられたもの。
ニセアカシア林	造成法面などの緑化木として植栽され、成長は早いが倒伏しやすく単純林を形成しやすい。
竹林	タケノコ生産のモウソウチク林が多く、放置され、過密状態の林分もよくみられる。隣接する他の植生に侵入して拡大の傾向がみられる。
高茎草本	淀川河川敷のヨシ、オギ、セイタカヨシなどの草本群落。群落高は1m～5m程度。
低茎草本	休耕田のシロツメクサ群落、畦のチガヤ群落など、田園地域に付随する群落高1m以下の雑草群落。
芝草地	公園緑地、ゴルフ場などの管理された芝生地。
伐採跡地	樹林高5m程度までの陽地性木本群落。
園地型植栽	公園緑地、街路樹、住宅団地などの植栽などの中高木の疎林。
水田	東部地域山間部の棚田や湿田、圃場整備された水田、平地のため池灌漑水田、淀川沿いの河川灌漑水田などさまざまなタイプの水田がみられる。
畑	野菜栽培地などの耕作地。枚方市の農業は畜産と米が中心で野菜は少なく、まとまった畑はみられない。
造成直後の裸地	開発などの影響を受けた人工裸地。
水域	河川、ため池。山間地の小規模なため池、平地の大きなため池などさまざまなタイプがみられる。

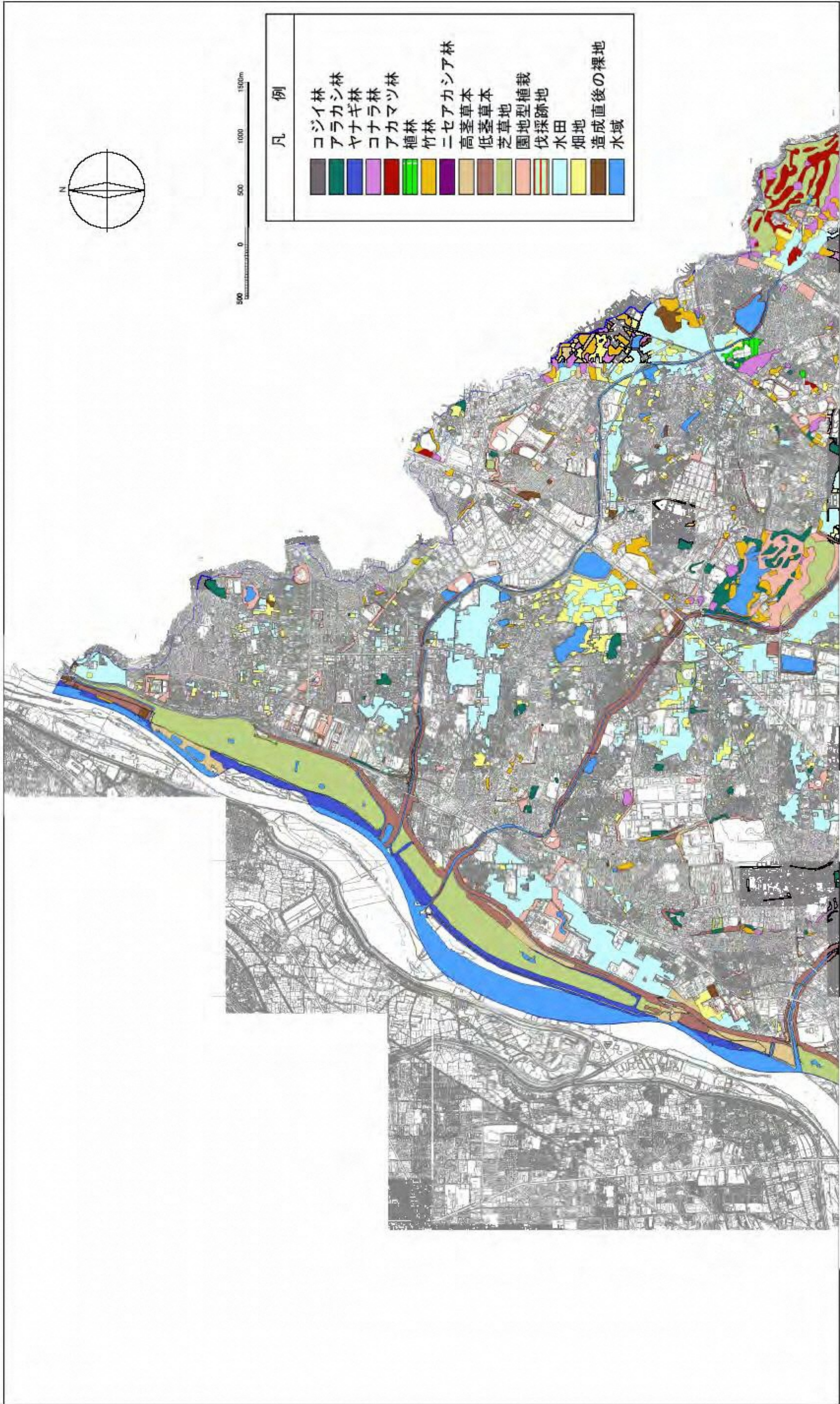


図-3-1(1) 相観植生図(1)

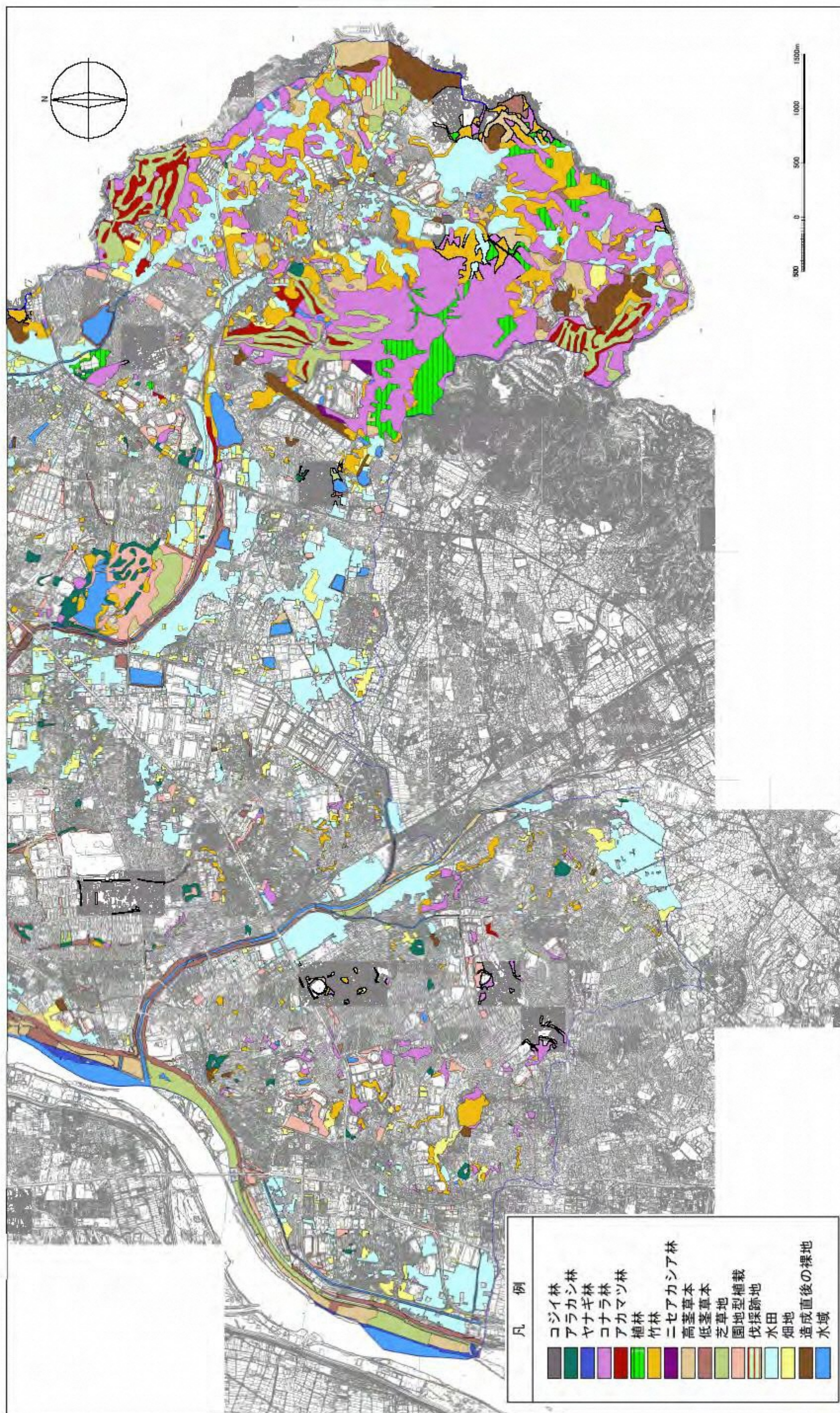


図-3-1(2) 相観植生図(2)

2. 植生の変化状況

植生の変化について、相観植生図の改訂結果をもとに、表-3-2に示す視点から整理・分析を行った。

表-3-2 相観植生図の分析の視点

整理・分析項目	考察の視点
①緑被率の変化	市域において生物多様性の保全やレクリエーションの場としての土地利用の指標となる緑被率について、その経年的な変化を考察する。
②主な変化箇所の整理	面積的に規模の大きい変化等、主な変化箇所についてその変化内容、変化状況について整理を行い、植生の変化パターンの類型化を行い、枚方市における植生の変化状況を概括的に把握する。
③孤立林群の連続性の変化	樹林や緑地の連続性は市街化の進んだ地域では、生物多様性保全を図る上で重要な要素であり、この変化状況について考察する。

2-1. 緑被率の変化

今回の調査結果から緑被面積・緑被率を算出した結果、表-3-3および図-3-2に示したとおり、緑被面積2066.9ha、緑被率31.8%で、前回から低下していた。

低下の主な要因としては雑木林、農耕地、草地の減少であり、各種開発によりこれらの緑被が低下したものと推察される。

また、竹林は経年的に増加傾向にあり、近年、管理の粗放化から竹林が荒廃し、周辺樹林へ地下茎による旺盛な繁殖により分布面積を拡大していると推察される。

表-3-3 緑被面積・緑被率の経年変化

調査年	緑被面積(ha)	緑被率(%)
1990年	1969.4	30.5
2000年	2161.3	33.5
2007年	2066.9	31.8

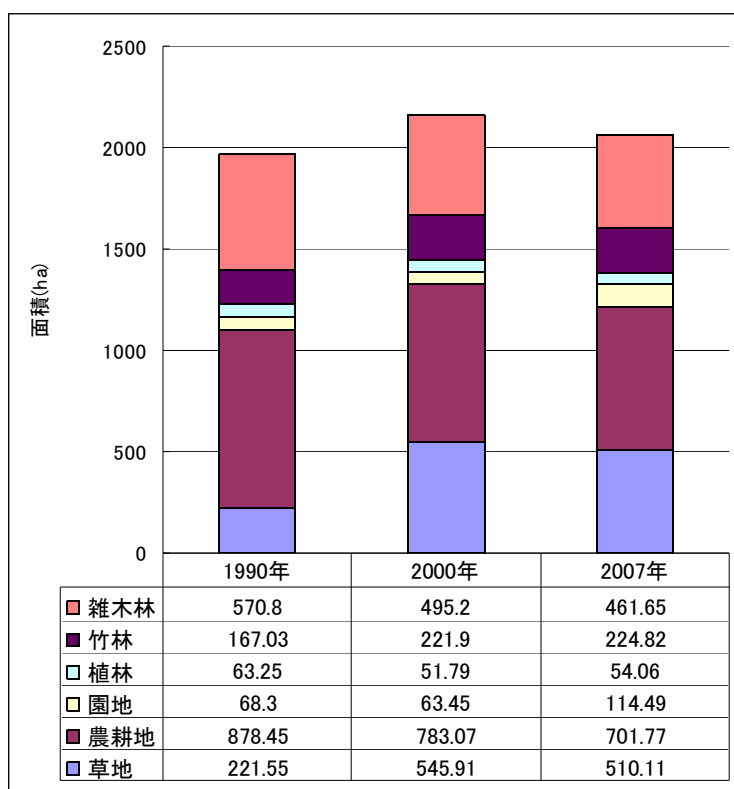


図-3-2 緑被別面積の変化(面積単位: ha)

緑被率について

ある地域又は地区における緑地(被)面積の占める割合。平面的な緑の量を把握するための指標で都市計画などに用いられる。

緑地面積は「緑地」と定義された「個々の土地」の合計面積であるが、「緑地」の定義が場合により異なるので注意が必要。また、「個々の土地」の面積についても、厳密に樹木、芝、草花など植物によって覆われた部分の土地(樹木の場合、その樹冠を水平面に投影した土地)の面積のみをいう場合と、樹林地や農地など「緑地」と定義された一団の土地の面積をいう場合とがある。

なお、工場立地法や自治体の風致地区条例などでは敷地面積に対する緑地の割合を緑地面積率と定義し、一定の数値を許可の基準等として定めている。

【出典：環境省EICネット】

本調査では前者の「植物によって覆われた部分の土地」の面積割合を緑被率として算出しています。

地域別の緑被状況として枚方市都市計画マスタープランにおいて7区分された各地域（北部地域，中部地域，南西部地域，中東部地域，中南部地域，南部地域，東部地域）ごとの緑被率と植生タイプ別（草本タイプ，樹林タイプ）の内訳を図-3-3に示した。

地域別の緑被の特徴は次のとおりである。

- ・ 東部地区は緑被地が6割に達するが他の地域は3割に満たない。
- ・ 中東部地区、南部地区は樹林タイプが比較的多いが、これは大きな孤立林である山田池公園や桜木台が位置することによる。
- ・ 中部地域も樹林タイプが比較的多いが、これは淀川のヤナギ林が寄与している。

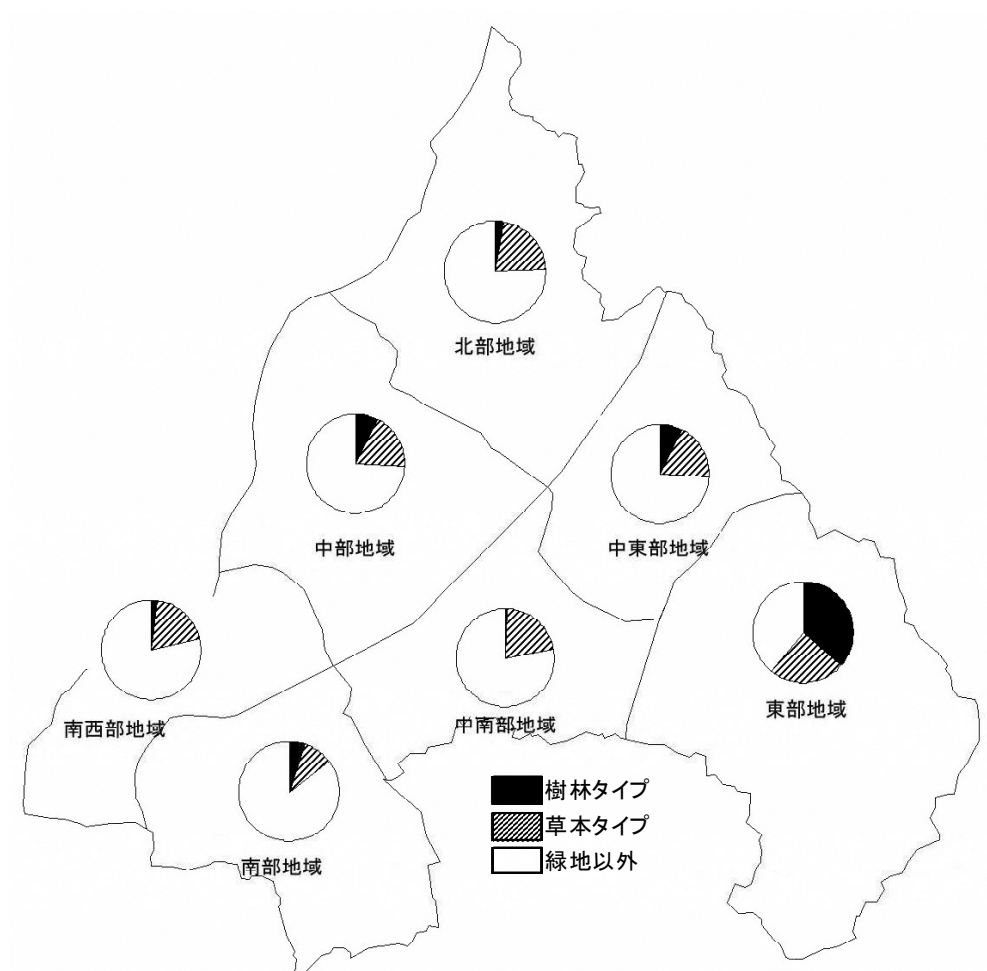


図-3-3 地域別緑被状況図

樹林タイプ：コジイ林・アラカシ林・ヤナギ林・コナラ林・アカマツ林・植林・ニセアカシア林・竹林
 草本タイプ：高茎草本・低茎草本・芝草地・伐採跡地・園地型植栽・水田・畑
 緑地以外：造成直後の裸地・水域・その他宅地等市街地

2-2. 主な変化箇所の整理

植生の主な変化箇所について、その概要を表-3-4に整理した。

表-3-4 植生変化の概要整理

変化内容	変化要因	主な該当箇所
緑地の減少	宅地開発等による人為的改変	・楠葉面取町の孤立林 ・藤阪天神町の孤立林 ・長尾播磨谷の孤立林 ・桜木台の孤立林
緑地の分断	道路建設に伴う改変による環境の分断化	・第二京阪道路 ・市道枚方藤阪線 ・府道枚方東部線
緑地の増加	公園整備、緑化による緑地の造成	・公園の新設 山之上の天野川沿いの公園 山田池公園の南側開設 交北公園 等 ・学校等の緑化植栽 (例：楠葉・大阪歯科大学等)
植生タイプの変化	時間経過に伴う植生の自然遷移による植生タイプの変化	・該当なし 前回調査以降5年間程度の時間経過では自然遷移は大きな変化として捉えられないと考えられる。

緑地の減少は、宅地開発等による人為的改変による孤立林の減少の他に、農耕地の減少も比較的大きく、特に都市部に残存する小規模な水田の減少はトンボ類やカエル類の地域個体群全体にとっては影響が大きなものと考えられる。

一方、緑地の増加は公共施設における緑化やマンション等での公園新設による増加がみられたが個々の面積は小さく全体としてはわずかであった。

その他、水域では淀川の酸化池が廃止された他は、大きな水域の変化はみられなかった。

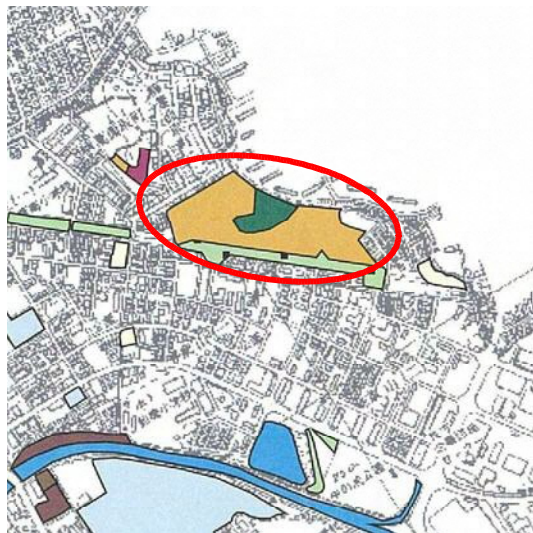
今回の調査で確認した上記の代表的な変化箇所の状況について以下に整理した。

楠葉面取町の孤立林

■変化内容：樹林の減少

■変化要因：宅地開発による人為改変

■変化状況



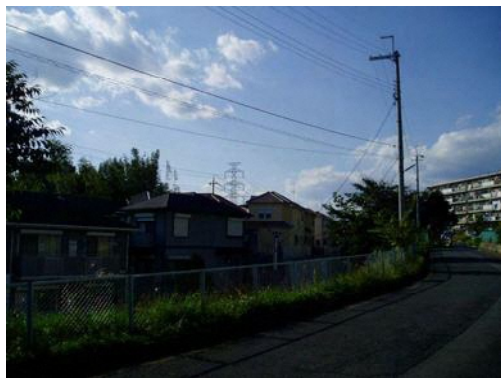
2002年

・竹林の中に一部アラカシ林が混じる孤立林

2007年

・宅地となっている。

■現在の状況



・一部に残存した樹林に住宅地が隣接する、以前と比較すると大きく断片化したものとなっている。

藤阪天神町の孤立林

■変化内容：樹林の減少

■変化要因：宅地開発による人為改変

■変化状況



2002年

- ・アラクシ林がまとまって成立していた。
- ・周辺の水田や王仁公園の緑地と一体となって、比較的規模の大きな緑地を形成していた。

2007年

- ・アラクシ林の大部分が改変され、樹林群が狭小となり、市道枚方藤阪線による水田の分断とも相まって、連続性が低下している。

■現在の状況



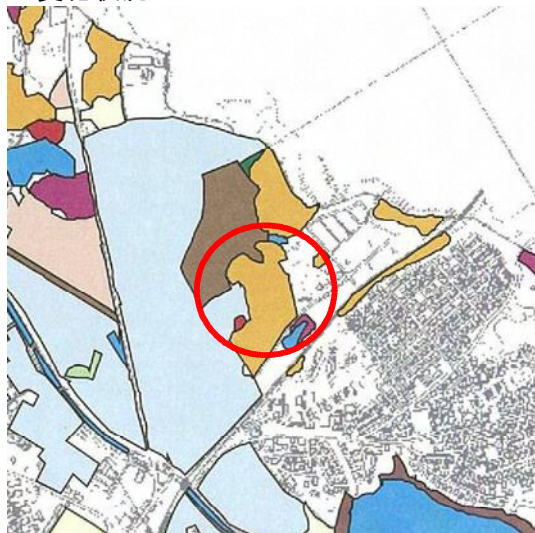
- ・市内でも規模の大きいアラクシ林であったが、そのほとんどが宅地開発により消失した。
- ・一部に残存した樹林が残っているが、以前に比べると大きく断片化したものとなっている。

長尾播磨谷の孤立林

■変化内容：樹林の減少

■変化要因：宅地開発による人為改変

■変化状況



2002年

- ・竹林が広く分布していた。

2007年

- ・現在造成工事中である。

■現在の状況



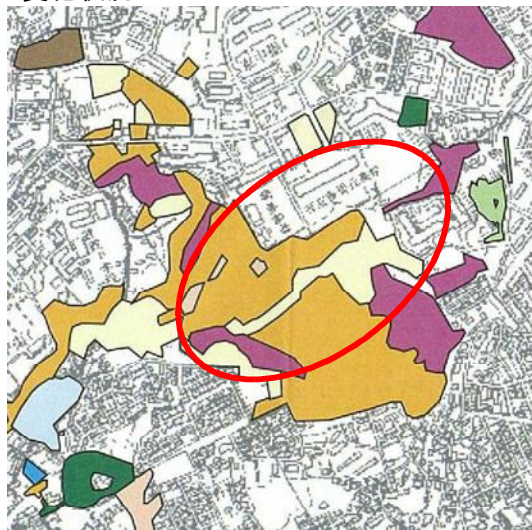
- ・造成地の奥に残存した竹林がみられる。
- ・手前の水田と奥の樹林との連続性が分断される形となっている。

桜木台の孤立林

■変化内容：樹林の減少

■変化要因：宅地開発による人為改変

■変化状況



2002年

・竹林の中に一部コナラ林が混じる孤立林

2007年

・宅地となっている。

■現在の状況



・残存した樹林は道路や宅地で分断される形となっている。

市道枚方藤阪線付近の水田

■変化内容：緑地の分断

■変化要因：道路建設に伴う線的な改変により緑地が分断

■変化状況



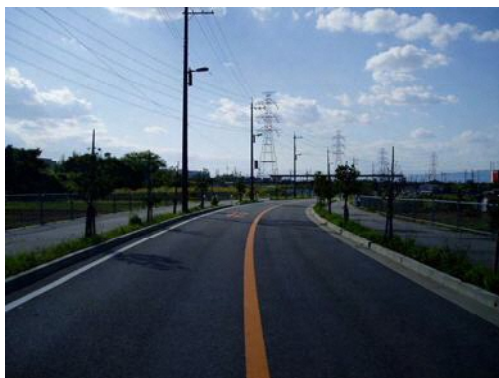
2002年

- ・水田が周辺の樹林と連続する形で広く分布していた。
- ・当時の調査では植物の希少種のおぐルマが確認されていた。

2007年

- ・道路の敷設により、水田が分断されている。

■現在の状況



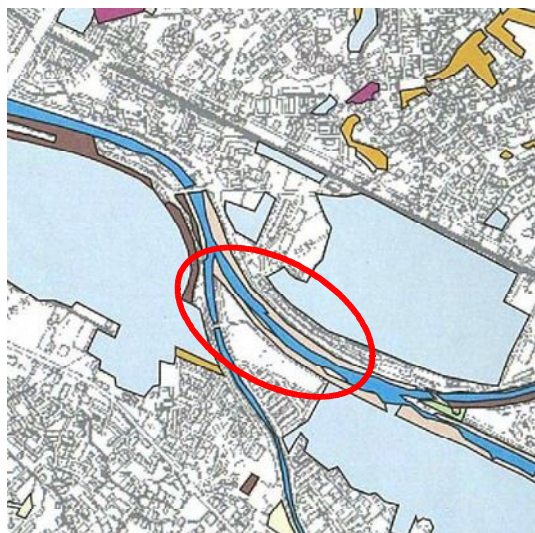
- ・道路の巾や構造からみてカエル類等の移動は難しいと考えられる。

山之上の天野川堤防上の公園

■変化内容：緑地の増加

■変化要因：公園整備による緑地の新設

■変化状況



2002年

- ・緑地のない状況となっている。
- ・造成された空地となっていた。

2007年

- ・公園整備により、低茎草地が形成された

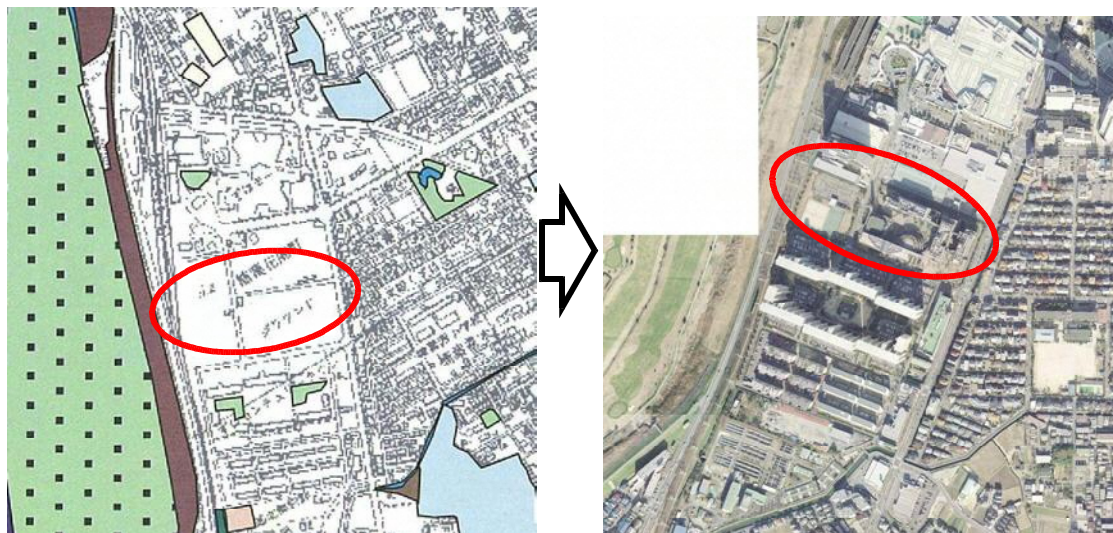
■現在の状況



- ・公園整備によりまとまりのある低茎草地が形成された。
- ・生物多様性の視点からは、天野川の緑地と一体となって、昆虫類等の生息環境として重要な緑地として期待できる。

楠葉・大阪歯科大学の緑化植栽帯

- 変化内容：緑地の増加
- 変化要因：緑化による緑地の新設
- 変化状況



2002年

- ・グラウンドとして利用されていたため、緑地はみられなかった。

2007年

- ・緑化植栽により樹林帯が形成された。

■現在の状況



- ・比較的密に植栽がなされ、線状の樹林帯が形成されている。
- ・生物多様性確保の観点からは、鳥類の生息環境の一部として利用が期待できる緑地である。

3. 孤立林群の連続性の変化

3-1. 緑地のネットワークの持つ意味

樹林や草地、耕作地等の緑地は生物の生息空間として重要な環境であるが、枚方市では東部の穂谷・尊延寺地区を除いては住宅地や工場等が建設され都市化が進んだ地域が多くを占めており、まとまった緑地はほとんどみられない。都市部では孤立状の緑地が残された状況となっており、これらの都市化が進んだ地域において人と自然が共生する都市づくりを行っていくためには、残された緑地を利用して生物の生息空間を効果的に保全していくことが求められる。

孤立した緑地はそれ単体では十分な生物の生息空間としては機能しないが、それらをネットワーク化していくことで、都市の生態的なポテンシャルの向上につながり、多様な生物と共生する緑豊かな都市づくりに向けて前進していくこととなる。

生物の生息空間は一般的に図-3-4に示すような広がりを持つことが好ましいとされている。

ただ、都市域の高密度な土地利用を想定した場合、個々の生息空間を拡大したり、配置や形状を変えることは容易ではない。したがって、このような土地利用の高密度な都市域においては、既存の不連続な生息空間(孤立林等)をコリドー(生態的回廊)で繋ぎ、このことにより市域全体の生物多様性の向上を図っていくことは、比較的取り組みやすい現実的な方向性となる。

枚方市においても高密度な土地利用が展開する都市域を有している点から、生息空間となる緑地(孤立林等)をネットワークさせるは生物多様性の保全を図る上で効果的な方策であるといえる。

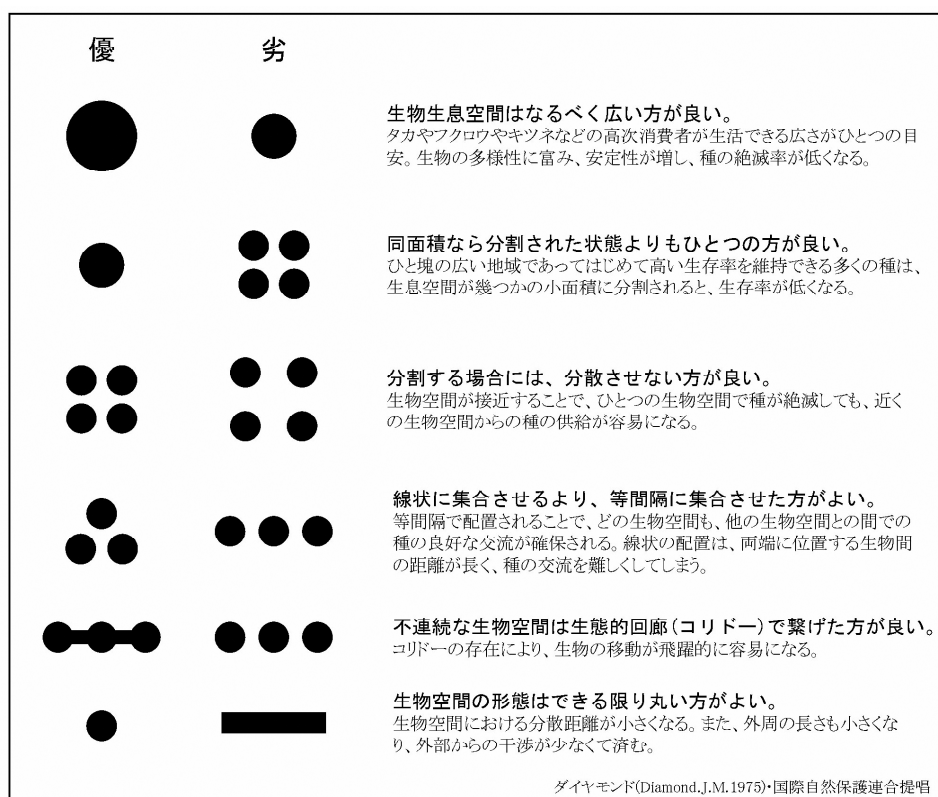
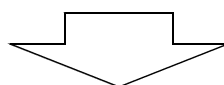


図-3-4 効率的な生息空間の配置

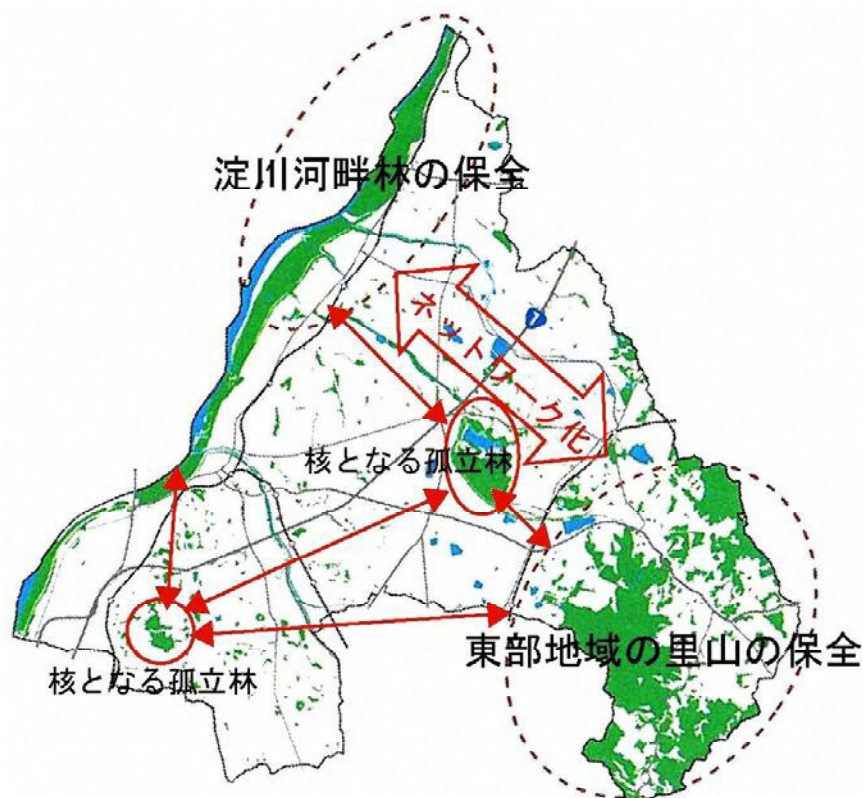
枚方市は東部に生駒山系の一角をなす穂谷・尊延寺地区というまとまった里山樹林域が分布し、一方で西部には淀川河川敷の河畔林が配置し、東西両側に核となる樹林域が存在している。これらそれぞれの核となる地域の保全、特に公的な担保がない東部地域の保全は今後の重要な課題であるが、これと同時に、それらの間に住宅地等の都市域が集中しており、これら東西の核となる樹林域をいかに緑地のネットワークで連結し、東西の山と川の交流を図っていくかという点についても、枚方市の市域全体の生物多様性の向上にとって重要な視点の一つといえる。

■枚方市における生物多様性保全の取り組みの方向性

- ①ネットワークの主要な核となる東部地域および淀川河畔林の保全
- ②ネットワークの連結性の向上による市域全体の生物多様性の向上



人と自然が共生する都市づくり



市域全体の生物多様性の向上

図-3-5 緑地のネットワークによる生物多様性の向上の概念図

3-2. 孤立林群のネットワークの分析

(1) ネットワークの核となる孤立林

前回(2000年～2001年)調査において、下記に示す条件によりネットワークの核となる孤立林を抽出している。

■ネットワークの核となる孤立林の抽出条件

- ①面積4ha以上の孤立林
- ②上記以外で林縁から内側50mまでの林縁環境のさらに内側に樹林内部環境を持つ孤立林

(前回調査報告書より)

この条件により前回調査時に抽出された孤立林について、前回調査以降の変化状況について表-3-5および図-3-6に整理した。その結果、公的な担保のない孤立林の多くは住宅地開発や道路建設等の人為的な改変により、面積を減少させ、核としての条件を逸しているものとなっていた。

表-3-5 ネットワークの核となる孤立林の変化状況

①面積4ha以上の孤立林	
淀川河畔林	国の管理用地として担保されており、大きな変化なし
楠葉面取町の竹林	住宅地開発により大部分が改変 面積が0.3haとなり核としての条件を逸する
山田池公園	府立公園として担保されており、大きな変化なし
藤阪天神	住宅地開発により大部分が改変 面積が0.3haとなり核としての条件を逸する
桜木台	住宅地開発により大部分が改変 内部環境を持ち、核としての条件を残す
②樹林内部環境を持つ孤立林	
藤田町・桑ヶ谷公園	市管理の公園として担保されており、大きな変化なし
菅原神社	神社社叢林として歴史的に保護されてきており、大きな変化なし
津田南町の竹林	道路建設により一部改変 内部構造がなくなり、核としての条件を逸する

■今後の取り組みの方向性

- ・残存する核となる孤立林を公的に担保できる形で保全する。
- ・核となる孤立林のうち開発等により減少した箇所については、ネットワークの一要素として有効に永続できるよう適切な管理を働きかける。

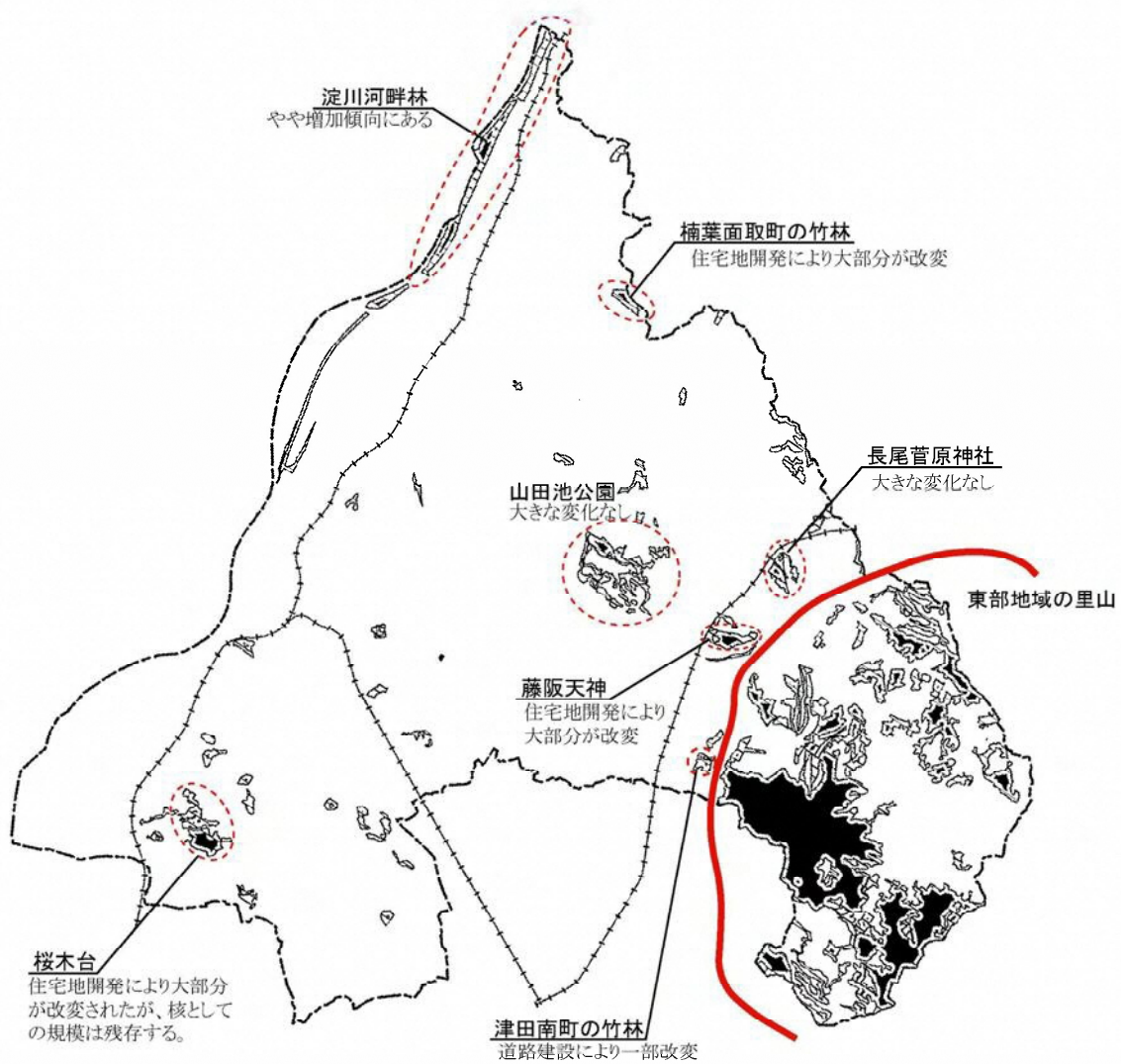


図-3-6 ネットワークの核となる孤立林の変化状況

(2) 孤立林の連続性

孤立林の土地開発による分断化は、それを契機としてそこから開発を拡大させ、動物の移動もできないほどの隔絶を生じさせ、生態系を貧化させていく点で地域の生物多様性保全の観点から問題となっている。

ここでは孤立林の連続性を評価するため前回調査と同様に孤立林の林縁から300m以内で他の樹林との連続性をもつ孤立林を群として抽出し、その変化状況を整理することとした。

その結果、大きな群・小さな群として抽出されたのは前回と同様の次の地域で、これら林群の配置に大きな変化はみられなかった。

■大きな群

- ・南部と南西部にかけて連続し、桜木台、意賀美神社、香里ヶ丘、茄子作などを包含する林群
- ・中東部の山田池公園を中心とする林群
- ・淀川河川敷の連続的な林群

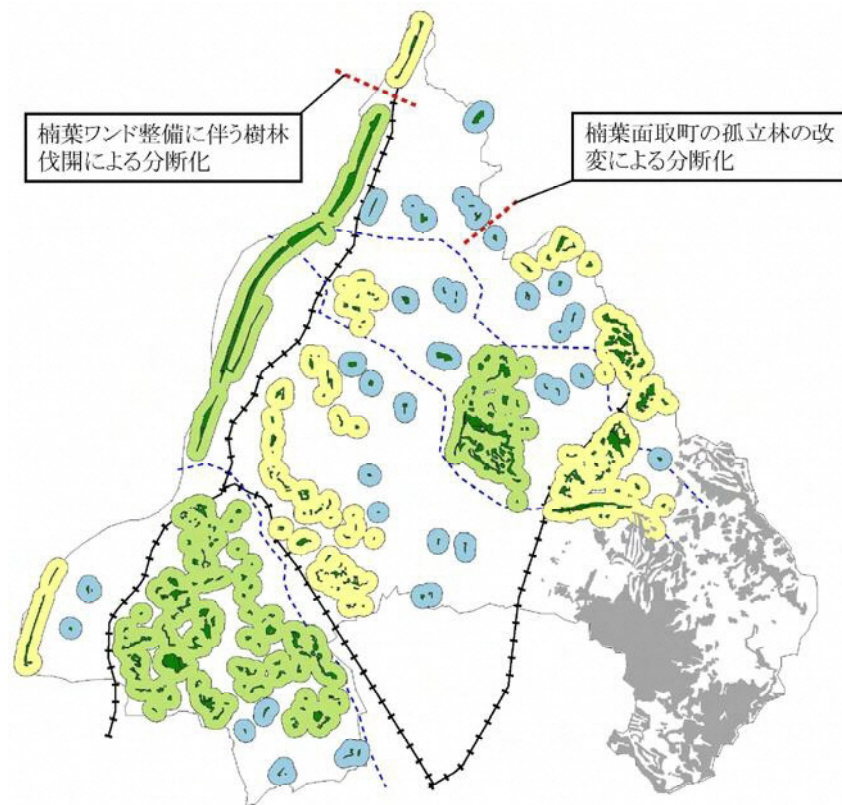
■小さな群

- ・御殿山神社付近から星丘付近まで帯状に連続する段丘崖斜面の林群
- ・藤阪一帯、長尾荒阪一帯の林群

ただし、土地開発等による孤立林の改変に伴い、一部に連続性の分断が2箇所で見られた。いずれも現状の植生状況やこれまでの連続性の状況からみて分断による影響は軽微と考えられる。

- ・淀川河川敷の連続的な河畔林(大きな群)の分断
楠葉ワンド整備にともなうヤナギ林の伐開により樹林の連続性が分断された。しかし、分断箇所はワンド整備後に湿性草地等が回復しており、生物の移動にあたっては実質的には連続した環境となっている。
- ・楠葉面取町の孤立林(ほぼ孤立)の分断
楠葉面取町の孤立林はネットワークの核となる規模の孤立林で、周囲の小規模な林分とともにほぼ孤立的な連続性の林群を形成していた。前回調査以降の宅地開発により更に孤立林は細分化され、孤立化が進む状態となった。今後は周辺の林群とのネットワーク確保のための緑化や分断化された孤立林の劣化を防ぐための林縁部保護等について働きかけていく必要がある。

■ 2007年 ■



■ 2001年 ■

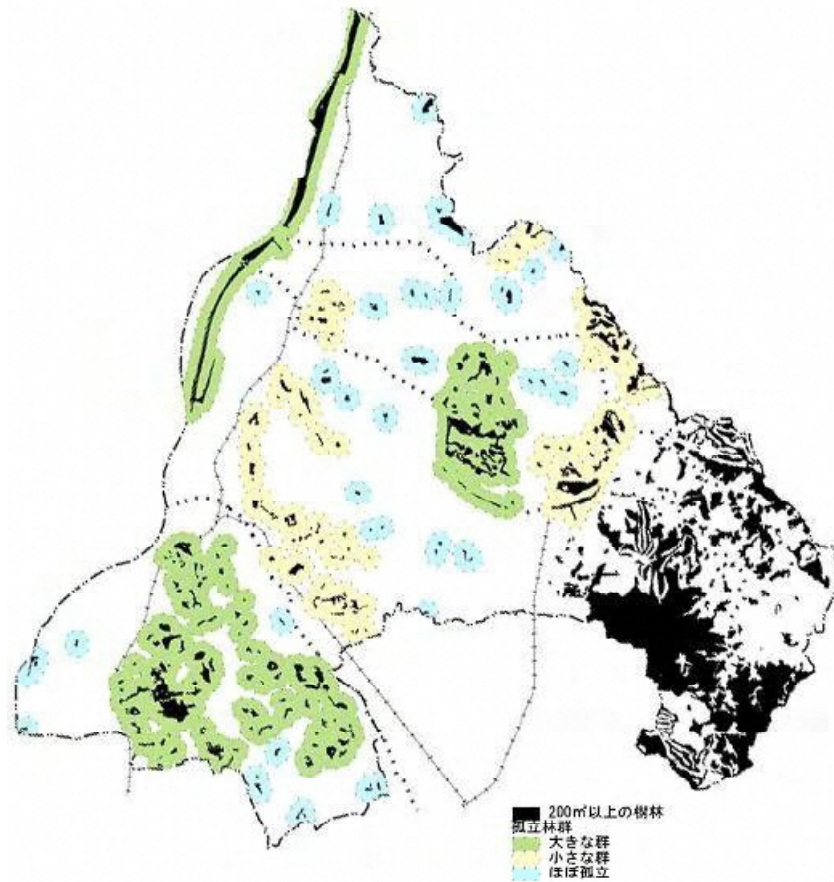


図-3-7 孤立林の連続性評価

第4章 今後の生物多様性保全の取り組みの方向性

1. 枚方市における生物多様性保全に対する脅威

枚方市は大都市大阪の郊外に位置し、古くから東西交通の要所として位置することなどから、特に高度成長期以降ベッドタウンや工業立地として多くの土地開発を受け入れ、そのことが市勢の発展の原動力ともなってきた。

一方、社会的な産業構造の変化やライフスタイルの変化等は、農林業従事者を減少させ、農林業地の管理の粗放化が進むとともに、これらの土地は市勢の発展に伴う土地開発需要に取り込まれ、劣化・減少を続けながら現在に至っていると推察される。

前回調査以降の5年間の相観植生図の変化をみても、「緑被率が低下していること」や「竹林面積が増加していること」など、上記の変化構図が継続していることが読みとれ、枚方市においてはこのような社会的な変化を背景とした生物多様性保全に対する脅威が大きな要因になっていると考えられる。

表-4-1にこのような背景を踏まえた枚方市における生物多様性保全に対する脅威を整理した。

表-4-1 枚方市における生物多様性保全に対する脅威

脅威の要因	環境の変化	生態系への影響事例
土地開発(宅地・道路開発, 農地区画整備)	樹林・草地、ため池等の生息環境の減少・劣化	・ 開発された土地に生育する植物個体や移動能力の小さい動物種の消失(希少種の場合影響が大) ・ 緑地の分断化・縮小化による緑地のネットワークの分断化が進むことによる地域全体の生物相の貧化・単純化
	新たな造成地の増加	・ 外来種(特に植物)の侵入による在来種の衰退
農林業の衰退による管理の粗放化	放棄水田の増加	・ 植生変化・陸地化により生息種の変化(水田特有の生物の衰退(メダカ, 水草等))
	里山での竹林の拡大	・ 林内植生の衰退による生息種の単純化(里山特有の生物種の衰退)
	クズの繁茂	・ 下層植生の衰退による生息種の単純化

2. 枚方市における生物多様性保全に向けた取り組み事例

上記に示した枚方市における生物多様性に対する脅威に対して、市が行政として主体的にもしくは支援的立場で実施している生物多様性保全に向けた主な取り組みについて以下に整理した。

2-1. 開発抑制のための法的制度の設置

枚方市では、平成5年に環境影響評価条例が施行され、大規模な開発に対して国が制定した環境影響評価法に該当しないような小規模な事業についても独自基準を設け、事前の環境影響評価を義務づけている。

この制度は土地開発という脅威に対して一定の抑制効果はあるものの、事業者が最大限の保全努力を図り、適正な手続きを経ることで開発を行うことは可能であり、開発前と同様の緑地の保存を図ることはできない。

また、同じ面積の開発であっても、東部地域のような大面積に対する開発と、市街地における小面積の孤立林における開発ではその相対的な影響が異なることやその開発される土地の位置によってはバイオトープネットワークにおける重要性が異なるが、このような視点を考慮して影響評価や保全対策の検討が行われることはほとんどなく、自然林や希少種の有無といった希少性にも終始した検討となりがちである。このため、特に孤立林のような既にこれまでの開発により希少性が劣化した環境について新たな視点からの価値は評価されないまま、開発されていくという課題もある。

枚方市東部の里山地域は希少種も多く保全の重要性は高いものの、上記のような観点からは、ネットワークの核として位置づけられている孤立林のうち、公的な担保がなく、法的な規制の少ない箇所の方が、土地開発という脅威に対する保全の優先順位は高いとも考えられる。

今後は環境影響評価制度の運用方法の再検討と共に、これら孤立林の保全も含め開発を規制する法的措置のあり方を検討していくことが必要である。

2-2. 東部里山の保全活動

枚方市の東部の穂谷・尊延寺・津田地区は、生駒山系に連なる山麓となっており、ここは豊かな自然がまともに残る、「市の緑の核」とも言うべき地区となっている。

棚田などの農耕地、ため池、森林など、様々な環境が組み合わさり、人間と自然、野生生物が共存する里山環境がまともに見られる地域である。里山は元来、農林業等の人為的な管理のもとに成立した二次的な自然で、適度な管理により維持されてきた側面があるが、昨今の農林業の様々な状況の変化から、このような管理を持続することが困難となり、里山の自然の維持が難しくなっている。

したがって、地域の農業振興と一体的に里山の有効活用を図ること、植生が荒廃した区域では保全・復元に努めるなど、計画的な保全・活用が急務となっている。

枚方市の東部地区の山地の一部には、全国でもめずらしい複雑な所有形態を有している箇所もあり、法的な保全措置や開発抑制の可能性を探るとともに、市民、地権者、行政が連携し、一体となった取組みが進められている。

現在は、図-4-1に示すように行政・地権者・市民が協働して里山保全活動を実施しており、行政はボランティア育成・支援、広報、活動の調整、情報発信、基金の創設など支援的なコーディネートを行っている。

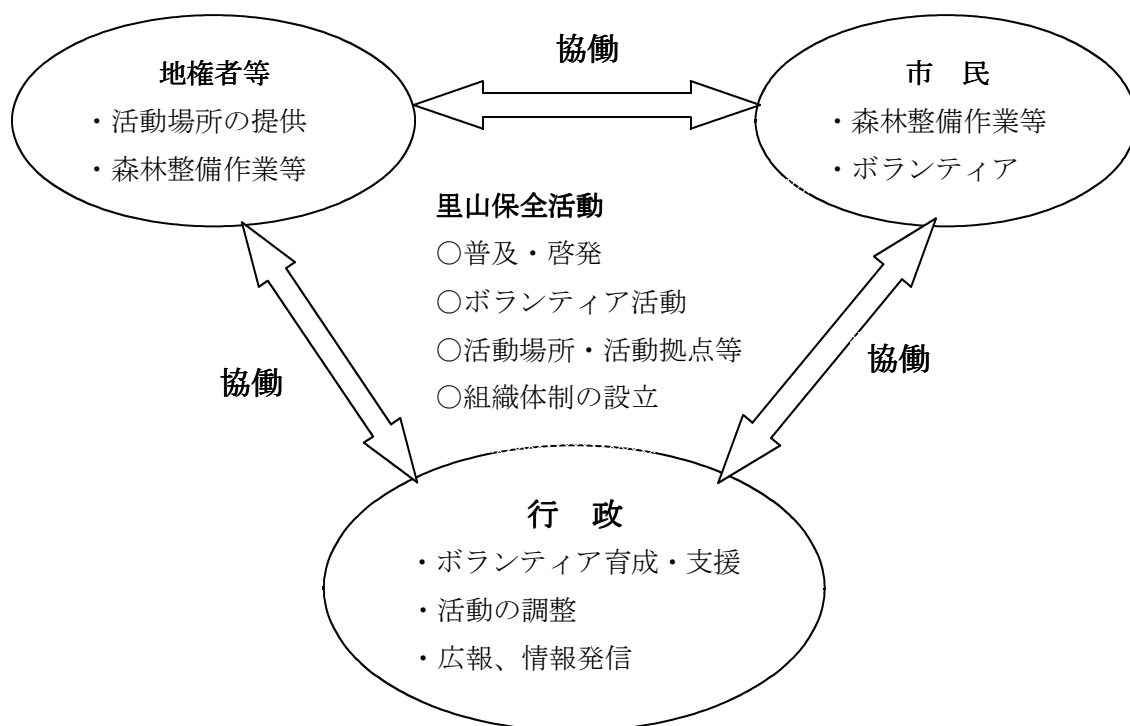


図-4-1 東部地区の里山保全活動の取り組み体制

2-3. 公共施設におけるビオトープの創出

近年、生物多様性保全に対する意識の高まりから都市域においてビオトープ創出の取り組みが多く実施されている。

枚方市においても学校や公園等の公共施設において、ビオトープとしての創出効果を得やすい小規模な池の設置が取り組まれている。

ビオトープ池の設置は、各設置場所単独でみた場合、小規模なものであり、生物の生息環境として核となるものではないが、これらがネットワークすることにより全体としての保全効果が期待できるものである。すなわち、先に整理した生物多様性保全に対する脅威に対しては、土地開発により分断化・狭小化された生息空間を孤立させずに連続させる橋渡し役が期待できるものである。

また、これらのビオトープの創出・調査・管理を実体験として児童や市民が行うことは、生物多様性保全に対する環境教育的意義や啓発・普及につながることから、積極的な取り組みが実施されているところである。

現在の枚方市の公共施設におけるビオトープ池の設置状況を表-4-2に示す。今後、小学校、中学校において継続的にビオトープ池の設置が進めば、相当規模のネットワークが期待できるものと考えられ、この取り組みの現状を適正に評価しながら、更なる取り組み拡大へと繋げていくことが今後の課題となる。

このようなビオトープ池の評価にあたっては、その指標生物として早期に誘致成果の現れるトンボ類が対象として考えられ、今後のビオトープづくりにあたって計画目標として活用していくことが期待される。トンボ類の飛翔距離は約1km程度といわれており、小中学校のネットワークに適した移動距離を有していることから、核となる山田池公園等のため池とネットワークが連結していくことで、身近に昆虫類の生態を観察し、地域生態系の向上を実感できる機会が増すものと考えられる。

表-4-2 公共施設におけるビオトープ設置状況

区 分	実 施 施 設
学校ビオトープ	(平成13年度)川越小、平野小、蹉蛇東小、樟葉南小、中宮小 (平成14年度)津田南小、桜丘小、招堤小、樟葉北小 (平成15年度)第一中、招堤中、船橋小 (平成16年度)楠葉中 (平成17年度)交北小 (平成18年度)五常小 (平成19年度)氷室小
公園ビオトープ	交北公園(淀川河川公園・山田池公園などの自然豊かなビオトープの中間に位置しており、ビオトープのネットワーク化を目的に設置)
その他	村野サプリ(旧村野小学校)

3. 今後の生物多様性保全に向けた取り組みの方向性

3-1. パートナーシップのあり方

近年、自然環境への関心の高まりと共に、市民共通の財産である郷土の自然を守り、育てて次代に引き継ぐ活動に参加したいと考える人、ボランティアの意欲をもつ人は増えている。その潜在的なニーズや意欲を十分にくみ取り、社会ニーズと市民ニーズを結びつけ、息の長いパートナーシップの構築を支援するなど、地域行政が果たすべき役割は大きいと考えられる。

枚方市には「ひらかた環境ネットワーク会議」や「枚方いきもの調査会」といった特定地域の保全に特化せず全市的な活動を行っている組織があり、市民活動の組織化としては熟度の高い状況にあると考えられる。

例えば、本調査の前回調査を契機に組織化された「枚方いきもの調査会」は定期的な調査活動とともに、「枚方ふるさといきもの調査」へも積極的に支援を行う他、環境省のモニタリングサイト1000の調査においても調査の主体的役割を担うなど、十分な分類知識を持った市民による調査組織として熟度の高い活動を実施している。

このような市民組織の活動を継続させ、多くの市民を取り込みながら全市民的な活動へ展開していくためには、一般初心者からの参加を対象とした事業への市民組織の主体的・積極的な関与を促し、組織の人的な充足・強化を支援すると共に、施策への展開を視野に入れた調査結果の有効な活用方策を行政やコンサルタントが有識者の助言を得ながら提示し、明確な目的意識の合意形成を行うことも今後必要となる。今後のふるさと生き物調査における各主体の役割分担(案)を表-4-3に示す。

表-4-3 今後のふるさといきもの調査における役割分担(案)

関係主体	役 割
行政(枚方市)	・ 調査事業の企画 ・ 予算的措置の調整 ・ 全体の調整
市民団体	・ 調査実施 ・ 結果データの集積・整理
コンサルタント	・ 調査データの分析、施策への提言
有識者	・ 専門的見地からの助言
上記全主体での合議	・ 調査方針の検討・確認

3-2. いきもの調査を生物多様性保全に活かすために

いきもの調査では多数の調査データが集積されていくものの、その結果としては点情報と生物リストが作成されるのみである場合が多く、その情報を有効に活用するためにも環境評価へ向けた分析・解析を行い、それを保全施策にまで展開していくことが必要となる。活用にあたっては、枚方市の自然環境の現状に応じ、次のような視点から評価を検討していくことが考えられる。

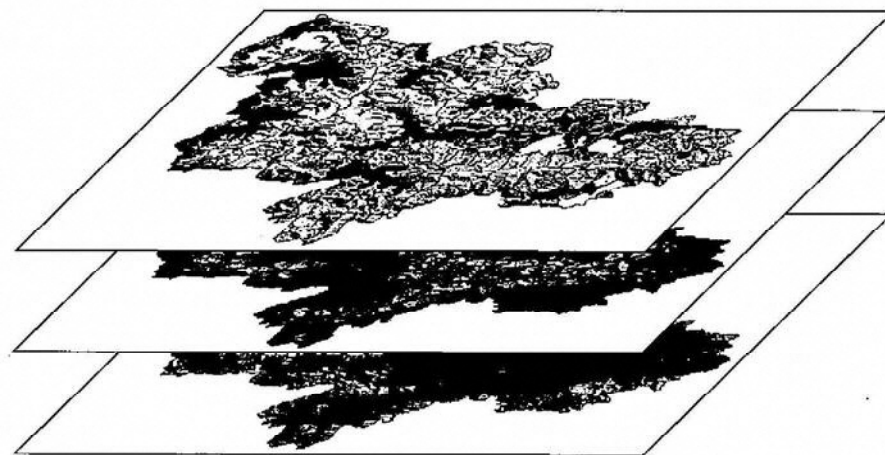
<生息環境評価の方向性>

- 生物の生息環境のネットワークを評価する。
市街地における孤立林ネットワークを評価する。
- 指標種を用いて生物の生息環境を評価する。
点情報を参考に環境を評価し、面的な情報へ展開する。

今回の調査においては、生息環境のネットワークの評価として、孤立林の連続性について地理情報システム(G I S)を用いて実施し、孤立林の連続性の変化状況について視覚的に整理することが出来た。

今後は枚方市の自然環境の現状に応じた指標種を設定し、それら指標种群の詳細な調査を行い、環境評価に繋げていくことが必要である。この際にも、G I Sの解析機能を用いた検討により、生息可能性の他に法規制等の情報を重ね合わせ潜在的に保全水準の高い区域の抽出や保全することで容易に回復可能な区域の抽出が可能となる。このような地域の保全水準を地図上に面的に示したポテンシャルマップの作成は今後、生物調査結果を環境評価に結びつけ、環境保全施策へと展開していくうえで、各主体が視覚的に捉えやすいひとつの目標となると考えられる。

このためにはまず、環境の評価を念頭に置いた帰納的な調査計画を立案し、各主体の合意形成のもと各主体の特性を活かした調査の推進が求められよう。



重ね合わせの模式図

カスミサンショウウオの生息ポテンシャルマップ、人為影響の程度および法規制区分の3種類の地図を使用した重ね合わせによる解析の様子を模式的に示す。実際にはコンピュータ上で処理している。

図-4-2 ポテンシャルマップの作成概念図

(出典：生き物調査を保全に生かすーカスミサンショウウオを事例としたNP0による農村生態系の保全ー, 村上俊朗, 環境保全学の理論と実践Ⅲ, 信山社サイテック, 2003年)